都市インフラ調査研究・ヨーロッパA

Grant ID S3RR11001
Research representative: 伊藤　毅

1. 研究概要

本研究は都市のインフラストラクチャー（以下、「都市インフラ」）の類型論的・地域史的比較を試みながら、都市インフラ概念の深化と拡大を推し進め、現代都市がかかえる喫緊の諸問題に対し、関連する専門分野の先端的な知見を統合するかたちで一定の寄与を行うことを目的とする。

21Cに入り直面しつつある都市の問題群の背景のひとつは、都市をさまざまなレベルで下支えする基幹施設である都市インフラ（社会資本、エネルギー研究、社会関係資本などを含む）の問題として焦点化することが可能である。しかし都市インフラの歴史・文化的側面や政治・社会的側面の研究は著しく遅れており、建築史・都市史・土木史などを有機的かつ緊密に連携する方法と場の共有が俟たれている。

以上の研究の趣旨のもと、昨年度に引き続き、建築学専攻建築史研究室、都市工学専攻都市デザイン研究室、社会基盤工学景観研究室、また他大学を含む西洋建築史、西洋史学研究者らのメンバーからなる「沼地研究会」の活動を行ってきた。なかでも、同研究会の一部会である「オランダ沼地研究会」は、オランダ・フリースラント州諸都市の調査研究を主体に、論文購読・資料収集・現地調査などを共同で行うものである。

2011年度には月例の研究会とそれに向けた準備会、さらにフリースラント州諸都市の現地調査を行った。またフランスとイタリアをそれぞれフィールドとする研究会との合同研究会（合同沼地研究会）での発表も行った。

本報告書では主としてオランダ沼地研究会の現地調査に関する内容・結果・分析について記述する。2012年度は引き続きオランダ都市史に関する文献の輪読や、関係諸論文の勉強会、調査結果の分析・検討を行っていく予定である。また建築および街区・都市の実測を中心とするさらなる現地調査を予定している。

なお本報告は、伊藤毅（2）、松田法子（3.1）、宮脇哲司（1、2、4.1、5、）、髙橋元貴（3.2、4.4）、小島見和（4.2）、初田香成（全体統括、編集）が作成した（括弧内は本報告書の担当した章・節番号）。

2. はじめに

2.1 研究趣旨

本研究会が称する「沼地」とはひろく水と陸の中間形態とも言える低地・低湿地の一般を指し、研究会の主たる関心はこうした地理的あるいは自然的条件と、テリトリー・都市・集落・建築といった空間的媒介によって人類が結んできた関係史の理解にある。以下では、本研究が射程とする４つの主論点について記述する。

2.1.1 都市インフラ論

本研究は歴史的・複合的観点に基づく「都市インフラ」概念の拡大と深化を目的としている。ごく普通の人々が住む身近な住宅地の風景から、道路・鉄道・エネルギーを経て、地球規模の陸地と水にいたるまでを考察の対象に加えながら、新たな都市インフラ論の構築に寄与することを目指す。

ここでは都市インフラを以下のような諸側面からなるものとして捉えている。

(1) 都市インフラの物理的側面
- 骨格：地盤（沼地干拓・埋立・地下・人工地盤等）、地形、港湾、軍事施設など
- 循環：交通（街路・道路、鉄道、水路・運河等）、エネルギー供給（薪炭、油）、上下水道など
- 組織：建築・敷地、空地、街路、街区、地区などの都市組織全体

(2) 都市インフラの文化的、政治・社会的側面
- 社会的共通資本、社会関係資本
  ：コミュニティ、教育、治安、文化など

以上の目的に基づき、オランダ沼地研究会では特に都市と水の関係から生じる、前記広義の「都市インフラ」について着目し、研究を進めている。

2.1.2 小規模都市論 ― 「一群の都市」論

産業革命以後、爆発的に規模を拡大したメガシティと呼ばれるような大都市ではなく、比較的小規模なままで拡大せずに都市域を維持してきた都市を、研究対象としていかに焦点化するかについて、本研究を通じて思考したいと考える。メガシティがその巨大さゆえに多くの行き詰まりを抱えている現代において、小規模都市のありようは、これからの都市のあり方について考えるうえでも多くの示唆を与えてくれるだろう。

ここで我々が想定しているのは〈一群の都市〉という概念である。その研究対象地に、オランダのフリースラント州11都市（Elf Steden）を選んだ。11都市として括られるのは、Leeuwarden（以下、レーワルデン）、Sneek（スネーク）、Ijlst（エイルスト）、Sloten（スローテン）、Franeker（フラネケル）、Harlingen（ハーリンヘン）、Bolsward（ボルスワルド）、Stavoren（スタフォーレン）、Hindeloopen（ヒンデローペン）、Dokkum（ドックム）、Workum（ウォルカム）の 11 である。フリースラントとは、北海に面し、アイセル湖をはさんで北ホラント州と向かい合うオランダ１１州のひとつである。フリースラント州は唯一にフリジア語を公用語とし、人々は少数民族フリース人として他と区別されるなど、文化の面で他地域と一線を画している。また、オランダの利水技術の起源として位置づけられる、テルプ（terp、人工的な微高地上の集落）が、現在も数多く存在することは特筆に価する。そして、フリースラント11都市とは、中世期に都市特権を獲得し、歴史的に政治・商業等、様々な点でフリースラントの基盤となった都市群であり、現在に至るまで他の集落とは区別されている。

これらは歴史的に繋がりを形成してきた都市群であり、都市的機能を様々に分担しながら発展してきた経緯があ

る。一方で個々の都市は、歴史、文化、言語においてそれぞれの多様性を保持している。フリースラントの諸都市がその規模を小さいままに維持し、かつそれぞれの個性を持続させていたことと都市間の繋がり、ネットワークのありかたに注目している。我々はフリースラント州 11 都市にみられるこのような姿について〈一群の都市〉というキーワードとともに取り上げ、検討してみたい。この都市間ネットワークを担保しているものこそは、すでに述べたとおり「都市インフラ」である。

これまで都市史研究が個別の都市ないし都市内の地域を対象としていたのに対し、複数の都市をひとまとまりに対象化することで、都市という個別のものの領域から、都市相互の関係性へと視点を転換させることを狙っている。そして都市それぞれの機能分担のありかたや、都市間の類似性あるいは差異の論点化を目指すものである。

2.1.3　テリトリオ論

本研究は当初、都市インフラ論、都市の群生論としてスタートしたが、ここにきて議論をさらにもう一段階、展開・止揚するために、「テリトリオ（territorio）」という概念を導入するにいたった。

「テリトリオ」とは「領域・地域」を意味するイタリア語であり、1960 年代以後のイタリアで、建築・都市・修景を扱う学問領域において対象化され、鍛えられてきた概念である。とくに急速にその姿をかえつつあった地方の風景（パエサッジオ paesaggio)を保存し修復整備するための地域計画の範囲設定という必要性から登場し、いまやイタリアをはじめ西ヨーロッパの地域計画ではテリトリオあるいはテリトリーという語はごく普通の言葉として定着している。

われわれの都市インフラと都市の群生という視角にもすでに一定の領域的広がりが前提されていたが、いま振り返るとその領域は単なる漠然とした地理的広がりとしてイメージされているに過ぎなかった。そこでイタリアで開発・展開したテリトリオ概念が参照されることになったが、本研究におけるテリトリオとは、イタリアにおけるそれと必ずしも意味を同じくするものではない。

ここでテリトリオという語にわれわれが仮託しようとしているのは、これまでの国内外の研究・現地調査におけるフィールドワークのなかで培われ、とくに「沼地」を対象とするオランダ・イタリア・フランスの研究活動の流れのなかで、いわば必然的に到達した自律的な概念としてのテリトリオである。

テリトリオという概念をわれわれは独自に以下に示すような諸点から構築しようとしているが、その方法論はまだ緒についたばかりで未熟である。しかし、従来の建築史や都市史、単体としてのモニュメントを一度テリトリオという広がりのなかで再定義し、ふたたび建築や都市へと回帰してゆくために必ず通過しなければならない、方法論上の不可避のプロセスと考えている。

テリトリオを対象とするにあたり、その枠組と研究方法として以下の問題群を現在検討している。

(1)　テリトリオの枠組

- 大地性：大地領域（大地・沼地・沿海・島・水）を対象とする。
- 居住性：居住域・活動域を中心とした対象設定。
- 成層的空間：大地‐利用‐景観という成層性に立脚。
- 歴史性：自然的変化、人為的変化が重合する不可逆的な時間推移を備える。
- 統合的環境：物理的環境（地形、構築物等）と人文・社会的環境の統合。

(2)　テリトリオ研究の方法（問題の所在）

- 図と地：「図」（一般的な都市組織）に加え、「地」（地形・地層、沼、災害、土地利用等）の対象化。
- 分節：テリトリオを多様に構成する分節・切片（セグメント）の発見、その歴史的動態の解明。
- 結節：分節群の間の関係・配列・群性の歴史的考察、テリトリオへの結節・統合の構造的理解。
- 部分と全体／内と外の再定義。
- 社会＝空間構造論としてのテリトリオ研究。

(3)　テリトリオとしてのモニュメント

モニュメントはテリトリオの一切片というよりは特異点というべき存在であり、その総合性からみて、もうひとつのテリトリオであるといえる。モニュメントは語の本来的な意味からして、時代の記念性やイデアを纏いつつ登場するが、その位置づけは時代とともに変化し、その歴史的経緯はモニュメントの成層として現象する。モニュメントの立地や外観、使われる素材や意匠・技術はそれを取り巻く施主はもとより建築家・技術者集団・地域の社会集団などと深く関係し、いわば一つのテリトリオを形成している。宗教的モニュメントにはとくにその性格が顕著にあらわれる。

以上のような問題意識をもちつつ、かつ建築史・都市史のフィールドワークのなかであくまで現地に即する論理構築を行うことを目指す。

2.1.4　国際的比較都市史研究　16C-19C

本研究は 16C-19C の水と都市を主題とした国際比較都市史研究の一貫でもある。比較研究は、オランダ・フランス・イタリア・日本の諸都市をフィールドに、都市空間と都市インフラの関係の読み取り、低地の開発・制御を核としたものである。この目的のため、フランス沼地研究会とイタリア沼地研究会が 2010 年度より活動しており、それぞれの構成員が一同に会する合同沼地研究会において、各研究会間の緊密な連携と情報共有を行っている。また、それぞれの研究会の構成員は、建築史・都市史のみならず、西洋史、経済史など、多くの専門家からなっており、各分野の専門知を結集しつつ、学際的連携を図っている。

2.2 研究会活動

2.2.1　オランダ沼地研究会

オランダ沼地研究会は月に一度の本研究会と、必要に応じ適宜行われる準備会とからなる。2011 年度の主な活動内容は以下のとおりである。

①調査図面の CAD データ化（2010-2011 年度現地調査）
②ヒアリング・古写真・図面など現地調査で得た住宅・街区・都市調査結果に関する検討と分析
③都市の絵図（16-17C)、地籍図（1832 年、1887 年)、センサス・財産史料（19C）を用いた分析
- 都市のマクロな空間構成（以下、「都市モデル」）に関する考察
- 都市の形成過程に関する分析（主に 16C-現代）
- HISGIS（地籍台帳のデジタルアーカイブ）による土地所有形態に関する分析
- 地積図とセンサス史料による、19C フリースラント諸都市における社会＝空間構造に関する分析など

④先行研究、広域地誌図、atlas 資料を用いた分析

- フリースラント広域の地勢形成史の整理
- 領域構造とインフラ類型の考察
- フリースラントの宗教権力とそれが主導する土地干拓に関する考察など

⑤文献レビュー（フリースラント史・各都市史・オランダ建築史・絵地図史・水系組織史・技術史等）
- 『最初の近代経済 -オランダ経済の成功・失敗と持続力 1500~1815』（名古屋大学出版会、二〇〇九年）
- 『FRISIA Illustrata, Tien eeuwen Friesland en de Friesen』
- 『Frieslands verleden　De Friezen en hun geschiedenis in vijftig verhalen』
- 『De wordingsgeschiedenis van Fryslan in thema's』など

2.2.2　合同沼地研究会

第 3 回合同沼地研究会（2012 年 3 月 1 日）
- 宮脇哲司・奥原徹・兒玉大(建築学専攻 伊藤研究室)
「フリースラント・テリトリオの構成(分節)要素の整理・考察／テリトリオ分析深化の試み」
- 髙橋元貴(建築学専攻　伊藤研究室)
「近世・近代期における Bolsward の空間＝社会構造の一考察」

2.3 第 4 回フリースラント 11 都市調査

2.3.1　調査の概要・目的・項目

2009 年度・2010 年度に行った調査に引き続き、本年度も以下のとおり現地調査を行った。

(1)　期間・調査都市・参加者
期間：2011 年 9 月 4 日－9 月 17 日
調査都市：ボルスワルド、　ドックム
滞在都市：同上
参加者：伊藤　毅(建築学専攻 教授)
中島智章(工学院大学建築学部　准教授)
初田香成(建築学専攻　助教)
松田法子(建築学専攻　学術支援職員)
宮脇哲司(建築学専攻伊藤研究室 博士課程)
髙橋元貴(建築学専攻伊藤研究室 博士課程)
小島見和(建築学専攻伊藤研究室 博士課程)
奥原　徹(建築学専攻伊藤研究室 修士課程)
兒玉　大(建築学専攻伊藤研究室 修士課程)
井上真吾(建築学専攻伊藤研究室 修士課程)
(＊身分は当時)

(2)　調査目的
- 都市と都市インフラの関係性の究明
- 都市化の過程に関する史的分析
- 住宅の類型とその歴史的変遷に関する考察
- テリトリオ論のフィールドワーク

(3)　実測調査項目
- 住宅実測調査：ボルスワルド 6 軒、ドックム 8 軒
- 都市断面調査：ボルスワルド 3 面、ドックム 1 面
- 水関係調査：ボルスワルド
- 道関係調査：ドックム、ボルスワルド(定性評価)
- 他：煉瓦調査(ボルスワルド)、狭小間口宅地の現状調査(ボルスワルド)、都市構造分析

(4)　他調査項目
- 集落調査（Middel 海干拓集落、Terpenland のテルプ集落）
- ボルスワルド-ウォルカム-Heeg 運河視察
- 2012 年調査のための予備調査
- 資史料の蒐集
- 現地調査報告

2.3.2　現地調査の状況

ボルスワルド、ドックムの 2 都市において、昨年度の調査をふまえ、かつすでに収集済みの資史料を用いた事前準備を行ったうえで、住宅―街区―都市といった実測調査を行った。昨年までの調査を踏襲しつつも、本年度調査はテリトリオ論の構築・深化を目的としており、それぞれの調査において次のような新たな試みを含んでいる。

①住宅実測調査：都市的性格の強い建築(スティンズ・Stins・ブロックハイス・Blokhuis、都市内境界、宅地割)。
②都市断面実測：都市内テルプ・堤防に着目する長い断面線の選定。
③道関係調査・水関係調査：テリトリオを分節する水・大地の都市内挙動への着目・実測
③集落調査：テリトリオを分節する「宗教＝干拓」・「テルプ」への着目
④他調査：テリトリオを分節する「材」(煉瓦調査)、「土地割」(狭小間口宅地)、「水運」(運河視察)

これら調査結果と分析については 3 章以降に記述する。

2012 年一次調査予定地のレーワルデンとスネークにおいて調査対象となる住宅・街区の選定、またアーカイブにて資史料の蒐集もおこなった。ともに、フリースラント 11 都市において規模の大きい都市であり、予備調査の成果をふまえ今後調査計画を練っていく。

フリースラント州庁舎にて現地研究者、有識者に対する現地報告会を設け、発表と意見交換を行い、2010 年度調査の成果物を州及び調査対象住戸の住民に寄贈した。また、フリースラント州のカウンターパートと次年度の研究計画、日本・オランダ両国での出版計画についての打ち合わせも行った。

2.4 2011 年度調査対象都市の概容

2011 年実測調査を実施した 2 都市、ボルスワルドとドックムはフリースラント 11 都市において、スタフォーレン、レーワルデンと並び、成立の早い都市である。以下では、それぞれの都市の概容として、事前準備として調べた情報に基づき都市の略史を記述する。なお本節では下記の文献をもとに記述を行った。

・"De Friese elf steden　Bolwerken van cultuur" (Stichting Kultuer en Toerisme yn Fryslan, Leeuwarden,1997)
・"419 x Friesland" (P. Karstkarel, Fries Pers Boekerij, Leeuwarden, 2005)
・"11 Steden: 1560 2006" (Leeuwarder Courant, 2006)
・"Historische plattegronden van Nederlandse steden, deel 11.1, de Elf Steden van Friesland" (J.H.P. van der Vaart en D. de Vries, Fryske Akademy, Alphen aan den Rijn, 2006)

図 2.4.0.1 ボルスワルド航空写真(Tresoar 所蔵)

図 2.4.0.2 ドックム航空写真(Tresoar 所蔵)

2.4.1　ボルスワルド

(1)　起源

ボルスワルドは2つのテルプの上に成立した都市である。一つは町の北側にあり、紀元前にまで遡ると言われ、後にMartinikerk（教会）が位置することとなる。もう一つは南側に位置する細長い形状で、6Cから9Cの間に造られたとみられる商業のためのテルプ(handelsterp)である。Marneslenk（かつて存在した湾口）に近く、海に開かれた集落である。

(2) 15Cまで

11Cにボルスワルドで硬貨を用いた商取引が行われていたことが確認されており、11,12C頃にはMiddelzee（以下、ミッデル海）、Marneslenkの舟運による交易で発展していたと見られる。ミッデル海、Marneslenkが沈泥により埋まった後も、良好な水路を維持し交易都市として発展し、1422年にはハンザ同盟に加盟している。また、13Cにはブロエレケルク（教会）が建設され、周辺地域における宗教拠点としても機能していた。1380年頃に最初の環濠が形成されたとされている。1455年に都市特権を獲得、1446‐1466年Martinikerk建設、1474年市庁舎建設、二重濠の形成など、15Cまでに都市として大きく発展していく。またこの頃にStins（以下、スティンズ）[1]が建設されている。

(3) 16‐17C

1516‐7年、防備が強化され、その後も要塞化が進んでいく。1561年のJacob van Deventerによる古絵図には当時の状況が描かれ、その後の都市図、さらに現状と比べれば、この時期までに現在のボルスワルドの都市構造がほぼ完成し、以後は持続・安定してきたといえる。1614-17年に新市庁舎が建設され、地下には計量所を備えていた。

(4) 18C以後

1765年、市庁舎の増改築がなされ、現在見られる豪奢なロココ調の建築となった。19C以後、城壁・城門の取壊しがおこなわれるようになり、運河の一部が埋め立てられるなどするものの、かつての姿を十分に今に残している。

2.4.2 ドックム

(1) 起源

ドックムはフリースラントの北西部に位置し、Ee川（エー川）を挟む3つのテルプ(北側に2つ、南側に1つ)の上に集落が形成されたことに起源をもつ。754年にキリスト教宣教師Bonifatiusが殺害された地であり、巡礼地となり、フリースラント最古の教会が建設されるなど、宗教上大きな意味を持つ都市である。9世紀には北側のテルプが居住環境として整備されたと考えられている。

(2) 16Cまで

12Cには修道院やバルト海での交易で栄えた商人が、ドックム周辺の広大な土地を所有していたことが確認されており、フリースラント11都市のなかでも比較的早い段階で都市としての機能を持ち、1491年には都市特権を獲得している。

14-15Cには度重なる紛争に巻き込まれ、都市は要塞化し南側にはblokhuis（以下、ブロックハイス）[2]が建設された。1531年、カール5世により城壁の解体が決定され、ブロックハイスも破壊される。当時の様子は、Jacob van Deventerによる最古の絵地図(1565)に確認できる。その後Caspar de Roblesにより再び城壁・稜堡の建設が決定、旧市庁舎が建設され、オラニエ公の支配下に入ると1580年に要塞化され、ほぼ現状の都市形態に至った。1589年に塔を残し教会が解体され、1593年には計量所建設、1597年にはフリースラント海軍本部が設置されるなど、都市は活性化していく。これら15C末の都市改造は当時のドックムの繁栄ぶりを示すものであり、Grootdiep(都市を東西に横切る海港)において海水・淡水の分離が行われたのもこの頃である。

(3) 17C

1610年に新市庁舎がGrootdiepの北側に建設され、Nicolaas Geelkerckenの都市絵図(1616)が描かれる。

繁栄するドックムに大きな影を落とすことになるのが、17C前半、沈泥によりGrootdiepが海港としての機能を失ってしまったことである。このため、交易が隣接する周辺地域に限られることとなり、また1645年にはフリースラント海軍本部がハーリンヘンに移転してしまう。これに対し、Groningenとの交易のために都市間運河Stroobossertrekvaartを掘削するも、運河建設のための投資負担が祟り、また見込んでいたほどの収入も得られず、破産寸前に追い詰められる。1664年に描かれたSchotanusの都市絵図が当時の様子を現在に伝える。

(4) 18C以降

海港を失ったことで衰退の道を辿ることとなったものの、18Cには周辺地域での農業が発達し、卸売交易の中心として機能するようになった。19Cになると修道院の塔や城門の解体、転化利用が進み、街の輪郭は大きく変化してゆく。1858年にはドックム初のガス工場が稜堡に築かれた。20Cには人口集中・生活の低水準化のために、城壁・濠の外側へと町が拡張し、現在の姿に至った。

3. 住宅分析：都市建築の類型と特質

3.1 ボルスワルド・ドックムの住宅建築

3.1.1 2011年度 調査対象建築 概説

2011年度には、ボルスワルドおよびドックムの2都市において計14軒の住宅を抽出し、実測および聞き取り調査を行った。以下、各棟の概略について記述する。

ボルスワルド

〔1〕Grote Dijlakker 19：18C中期～19C中期築。運河に直結するワイン商の家。

〔2〕Kleine Dijlakker 4：17C前期築。狭小間口住居を併設する家。

〔3〕Grote Dijlakker 18：16C前期～19C前期築か。運河に接する複合建築。教会・政府系建物から住宅へ変遷か。

〔4〕Rijkstraat 7：17-18C築か。運河屈曲部の稠密街区にある小規模な家。

〔5〕Heeremastate 8：1480年頃築。ボルスワルドの有力家・Heerma家のスティンズ（stins）。

〔6〕Grote Dijlakker 13：1619年頃築。オランダ「黄金の世紀」における運河沿いの商人の館。

ドックム

〔7-10〕De Zijl 1,3,7,7A：1622年頃築。スティンズ（1414年）−ブロックハイス（blokhuis、1516年）−堰広場の商館（1622年）。運河インフラの要所と都市の防御建築・商館。

〔11〕Kleine Breedstraat 3：17C-18C築か。路地を取り込む商家。

〔12〕Waagstraat 20:17-18C築。計量所向い角地の商家。

〔13〕Boterstraat 8A：16C後期築。ドックム最古級住居。

〔14〕Lange Ooster13：20C前期築。近代の倉庫建築。

[1] 防御機能を持つ館。在地の有力者であったホーフデリンフ(Hoofdeling)により12c半ばからフリースラントで建てられた。3.2.2(1)、4.2.2(6)参照。
[2] 城壁などを備えた館。16世紀初頭、ザクセン侯やハプスブルグ家といった新たな領主たちによりフリースラント都市に建てられた新たな支配拠点。

ボルスワルド

〔1〕Grote Dijlakker 19

〔2〕Kleine Dijlakker 4

〔3〕Grote Dijlakker 18

〔4〕Rijkstraat 7

〔5〕Heeremastate 8

〔6〕Grote Dijlakker 13

ドックム

〔7-10〕De Zijl 1,3,7,7A

左から：〔11〕Kleine Breedstraat 3　〔12〕Waagstraat 20
〔13〕Boterstraat 8A　〔14〕Lange Ooster13
図 3.1.1.1　2011 年度調査建築一覧

3.1.2　各棟解説データの整備について

各棟のより詳しい解説については別に各棟解説データを作成し、(1)調査理由、(2)敷地構成、(3)建築構成、(4)居住史、(5)職業センサス資料に基づく19C前期の居住と住宅プランとの関係考察、(6)写真-図面集などについて整備している。以下にはGrote Dijlakker 19の例を挙げる。

Grote Dijlakker 19　(ボルスワルド)

18C中期～19C中期築

運河に直結するワイン商の家

■1．調査理由

建築側面が運河に直接面し、背面が都市の外周運河、前面は都市内主運河に面するという、運河との密接な立地関係。主屋が長大であるという建築的特徴。ファサードの年記（1843年）。

■2．敷地構成

敷地は間口7m強、奥行き70ー80mほどの奥に深い敷地。敷地再奥部は、ボルスワルドの都市外周を囲む運河に達する。敷地南側は、外周運河から分岐して引き入れられている細運河に面する。敷地の奥には数棟の付属屋が建てられているが、これらはいずれも新しい。

■3．建築構成

〈平面〉グラウンド・フロアー（以下「GF」）は建物の前面から背面までを貫通する廊下〔Gang〕を北側に通し、その南側に7つの部屋が直列。最も背面にある1室は主屋から張り出した増築部。これら7室は、建築年代によって3つの部分にわけられる。前面道路側から数えて3室までは19C半ば（聞き取りによると1843年築／正面ドア横に〔LIVM〕と〔1843〕の年記を刻む煉瓦あり）、主屋中央部の2室は18C半ば（聞き取りによると1757年築）で最も古く、背面側の2室は近年の増築。前面道路側の3室は、フリースラントのタウンハウスに典型的な〔前室・ベッドルーム・後室〕の3室構成。一方で建物最古の中央部は2室構成であるが、これが元は典型の3室構成であったのかどうかは不明。

なお最古部分が現在の道路線より敷地の奥に引き込んで建っていることについては、ひとつの仮説としてかつての運河幅（現在より広かった）との関係が推測される。

〈断面〉前面道路側から1室目までにあたる部分の垂直方向ユニットが最も多層で、地下室（セラー）とアティックを含め4層。ファサードはコーニス（軒蛇腹）型。同2室目と3室目のユニットは2層、同4・5室目はより棟高の低い2層、6・7室目は1層。奥に向かって棟高を低減しながら複数棟が連続する長大な構成は、運河に面する本主屋の側面外観を特徴づける。側壁壁面線は下方に向かって膨らむ（運河中の壁厚が大）。

地下のセラーには運河に面して小窓が開けられている。聞き取りによればこの窓越しに石炭など物資を舟と直接やりとりしたという。

19C半ばおよび18C半ばの棟における1層目の梁は当初材（聞き取りによる）。

〈その他〉聞き取りによる情報：小屋組の梁やトラス材にみられる刻みは〔Spant〕と呼ばれる部材接合のための印。

廊下の化粧材（白と黒の大理石系大型石板）は当初材。

観察知見：本家屋にみられる正面ドアまわりの付柱装飾は、ボルスワルドの他のタウンハウスにおいても多く確認される特徴。19C頃流行し、付加されたものか。素材は木製および鋳鉄製。本家屋では木製。

■4．居住史

現在のオーナーは大工で、7年前に入居。聞き取りによれば以前は地域の名望家、Famesta家という医師の家族が居住しており、さらに遡るとアムステルダムとの取引があるワイン商の住居であったという。

職業センサス（実施年は1827,30,31,32,33,34,37,42）に記録されている19C前期の居住者は次のとおりである。

凡例：姓名 / 職業 / 生年 / 居住期間 / センサス初出時の年齢

〔1〕Mesdag van Dirk Roos / 〔koopman・wijnhandelaar〕商人・ワイン商 / 1797 / ~1827-1842~ / 30歳
〔2〕Fockens (ev. D.R. van Mesdag) Albertina Eisabeth / 〔geen〕無職 / 1799 / 1830-1842~ / 29歳
〔3〕Spoelstra Gerbrig Jans / 〔dienstmeid〕家内奉公人/ 1808 / 1831-1833 / 23歳
〔4〕Visser Marijke Dirks / 〔dienstmeid〕家内奉公人 / 1806 / ~1827 / 21歳
〔5〕Mesdag Engeltje / 〔geen〕無職 / 1829 / (1829-)1830 / 1歳
〔6〕Kooltjer Inskje Inses / 〔geen〕無職 / 1814 / (1828-)1830 / 16歳
〔7〕Lantsing Willemina / 〔dienstmeid〕家内奉公人 / 1814 / (1835-)1837(-1841) / 23歳
〔8〕Bokma Anna Jacobs / 〔dienstmeid〕家内奉公人 / 1809 / (1838-)1842~ / 33歳

なお、上記凡例の「居住期間」はあくまでもセンサスにあらわれる見かけ上の居住期間であり、資料解題中に述べたとおり、実際の居住時期には前後に幅があることが想定される。

聞き取りで得られた“アムステルダムとの取引があるワイン商”が上記〔1〕Mesdag van Dirk Roosかどうかは不明だが、少なくとも19C前半を通して本家屋に居住していたのはワイン商であったことが確認された。またセンサスに基づけば、医師Famesta家の居住期間は19C前期ではない。

以上から、本家屋における19C前期の居住状況は次のように概括できる。ワイン商であるMesdag氏〔1〕と彼の妻Fockens (ev. D.R. van Mesdag) Albertina Eisabeth〔2〕が主な居住者である。2人の間には1829年に子供Mesdag Engeltje〔5〕が生まれている（：なお別の史料〈出生証明書 / Geboorteakte〉によれば、同夫妻の間にはほかに1人の娘〈1830年生〉と2人の息子〈1836年生・1838年生〉がいるが、これら3人の子供はセンサスには現れない）。同家には〔3〕Spoelstra Gerbrig Jans 、〔4〕Visser Marijke Dirks 、〔7〕Lantsing Willemina 、〔8〕Bokma Anna Jacobs など、ほぼ常に1名の住み込み家内奉公人がいた。年齢は21歳から33歳までで、最短1年・最長7年程度の幅で代わる代わる同家に奉公している（センサスの記載レベルにより、実際には居住していたが省略されている年があるかについては検討が必要）。ほか、家内奉公人不在の一時期に無職（：実質家内奉公人であったかは不明）の若者（別の史料によれば女性）〔6〕Kooltjer Inskje Inses が住んでいた。

■5．19C前期の居住と住宅プラン

職業センサスから知りうる19C前期の居住状況によれば、本家屋に同時期に居住する者はワイン商Mesdag一家と1名程度の家内奉公人である。当家はボルスワルドの家屋の中でもかなり大型の事例であるが、（センサスに記される情報の範囲において、という但し書き付きで）19C前期の当家屋はごく限定的な居住者によって使用されていたことになる。当家屋最古部分の建築年代（1757年）における居住・利用状況や、建設年代である18Cのボルスワルドにおける空間−社会構造への位置づけが課題となろう。

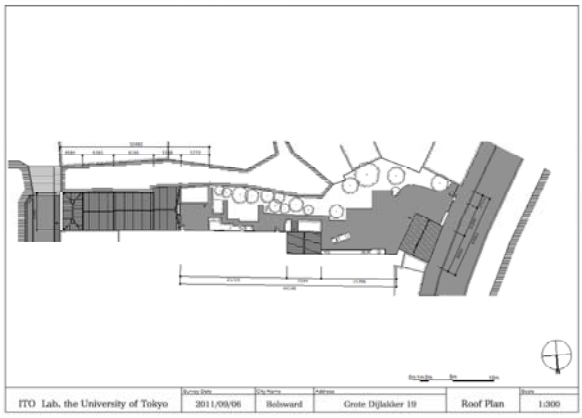
なお本家屋の正面にある〔1843〕の年記は、ここで使用したセンサス最終年（1842 年）の翌年であり、付柱装飾を伴うコーニス型ファサードの改修ないし前面道路側から数えて 3 室分の多層ユニット（地下セラー・アティックを含む）の増築は、ワイン商 Mesdag によって行われた可能性が高いといえるだろう。

■6．写真・図面（部分）

左：正面外観と運河　右：GF 廊下（Gang）

左：側面外観と運河　右：当家屋の付柱装飾／及び同様のファサードが連なる町並

図 3.1.2.1　ボルスワルド Grote Dijlakker 19　調査写真



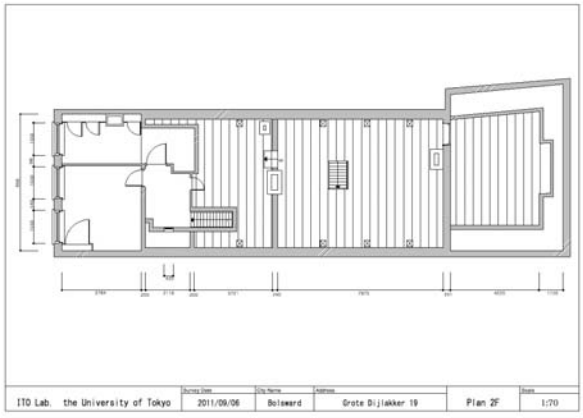


図 3.1.2.1　ボルスワルド Grote Dijlakker 19　実測図面　上から：配置図・梁行断面図・1stFL 平面図

3.1.3　調査対象建築の選定手法と分析上の位置付け

フリースラント11都市の住宅を対象とする一連の調査において、我々は主に次の諸点に注目して調査対象を選定している。(a) できるかぎり都市最古級の建築、(b) 立地が特徴的なもの（運河・広場・その他都市インフラなどとの関係による）、(c) 機能が特徴的なもの（ブロックハイス・スティンズなど）、(d) 形態が特徴的なもの（大型敷地・狭小敷地・路地の取り込みなど）、(e) 各時代において普遍的な〔普通の〕建築、などである（なお、予備調査では基本的に外観に基づく選定となる以上、外観の保存状態の良さと内部の改変の度合いが一致しない場合もあるが、これはやむを得ない事情としている）。

これらの選定方針と本年度調査した物件との関係はおおよそ次のような対応関係となる。

(a)：〔5〕,〔13〕
(b)：〔1〕,〔3〕 ,〔7-10〕,〔12〕
(c)：〔3〕,〔5〕 ,〔7-10〕
(d)：〔2〕,〔4〕,〔11〕,〔12〕
(e)：〔1〕,〔2〕,〔4〕,〔6〕 ,〔11〕,〔12〕 ,〔14〕

今年度調査を実施した建築の種類は、15Cのスティンズ（＝"Stone House" ）、16Cの古い住居、17-18Cの運河沿い商家・大型商館・狭小住居・教会などの転用住居、20Cの倉庫に至るまで幅広い内容となった。

15Cのスティンズ（防御機能をもつ居館）、16Cの古い住居については、ボルスワルドとドックムの2都市が11都市のなかでも古い歴史を有する都市であることと、そこから生じる特徴との関係を念頭におきながら今後考察していくための材料となる。とりわけスティンズについては、既に調査済みの都市を含め、都市の防衛・住民の避難所・有力家と都市との関わり（開発などを含む）などについてひもといていくための重要な手がかりとなることが予想される（スティンズについては2012年度調査予定であるレーワルデンにおいて、2軒目の実測調査を予定）。

17-18C の運河沿い商家・大型商館・狭小住居・教会などの転用住居については、これらの建設時期における各建築と都市との関わり、とくに立地条件（運河との関係、街区の特徴）からの分析が見込まれる。および本年度より分析を始めた 19C の職業センサスを併用することで、ボルスワルドの建築については 19C における都市の空間−社会構造と各建築との具体的な照合作業を行いうるため、この面での分析の深化が今後期待される。また 20C の建築については、2012 年度にスネークにおいて複数の建築を調査予定である。

3.1.4　2009-11 年度調査住宅に関する中間概括

〔一列三室型〕

2009-10 年度には、スローテン、ハーリンヘン、エイルスト、ヒンデローペンの 4 都市において住宅調査を実施した。これら 4 都市と、2011 年度に調査を行ったボルスワルド、ドックムをあわせた計 6 都市は、それぞれ成立時期も性格も異なる個性的な都市であるが、住宅建築については共通する類型を抽出することができる。

我々が各都市の主要部とみなし、調査対象とするような通りに位置する住宅の GF プランは、復原を行うと、建物の表から裏まで貫通する廊下を片側に配し、その隣に前室・ベッドルーム・後室を直列させる、「一列三室型」とでもいうべき平面構成をもつ。

この構成は、小規模な住宅から大規模なもの（例：裁判所など公的な性格を有するスローテンのダブル・ゲーブルハウス〔Heerenwal53〕など）まで、規模を横断する。かつ、17-19C のおおよそ 3 世紀にわたる建築年代を横断し、さらにはいずれの都市にも見いだせる典型である。

以上より一列三室型は、フリースラント 11 都市における 17C-19C の都市住宅において支配的な平面類型であると位置づけられる。

〔エントランスホール＋1 室（2 室）型〕

一方で我々は、支配的なこの一列三室型以外の類型を探すべく、調査対象を選定する通りの性格を変えて検討を行った。たとえばスローテンにおいて主に調査してきた住宅は都市内主運河に面するものであったが、2010 年度には、運河沿いの通りに直交する（運河をもたない）通り〔Dubbelstraat〕に注目した。その結果、エントランスホール＋1 室（ないし 2 室）型とでもいうべきタイプをみいだした〔Lindegracht15, Dubbelstraat196〕。

この類型はおおよそ次のような GF の構成によって特徴付けられる。（1）一列三室型よりもやや幅の広いエントランス（現段階では、店舗・作業場・居室・台所など複合的な空間であると予測される）、（2）奥行きの浅さ（5-7m）、である。スローテンでは運河沿いに商人の居館が立ち並んでいたのに対して（これらは一列三室型）、Dubbelstraat には職人や小売商など、運河沿いとは性格が異なる住民が居住していたという情報も得ている。この情報は現段階において 19C 後期ないし 20C 前期を遡るものではないが、今後別の史料との比較検討により、17-18C 頃の都市社会-空間構造と住宅建築との関係を明らかにすることが期待される。またそれを待つまでもなく、運河沿いに並ぶ宅地は比較的奥行きの深い短冊型敷地であるのに対して、運河に直交する道沿いの宅地は奥行きの浅い方形敷地であるという、地割・街区構成の特徴と建築類型の特徴との即時的な関係が指摘できる。運河沿いと運河に直交する道沿いとの地割の違いは、スローテンだけでなくこれまでに調査したほとんどの都市に共通するものである。

〔上層居室階について〕

以上のとおり、これまでに調査を実施した 11 都市の都市住宅は、煉瓦壁の位置・煉瓦の年代・梁の状況などを手がかりに、おおむね GF の復原的考察を行うことが可能である。それに対して、上層居室階（1stFL・Attic など）の復原は甚だ困難である。その理由は、GF では廊下と居室を区切る煉瓦壁が上層階には達しておらず部屋境が不明瞭であること、上階の部屋仕切りは、板など薄くて耐久性が低く、可変性の高い材料で作られていることなどが挙げられる。こうした制約を前提としたうえで、階段位置がほぼ当初のままであるとみなされる物件を手がかりに上層居室階の原型について復原を試みると、次のとおりである。

上層居室階は、GF 廊下から直交して登る螺旋階段あるいは直階段・跳ね上げ階段（：螺旋階段が古い形式）によって、道路側からみて前方と後方に二分割される。階段周辺は両居室にアクセスするための小さなホール状の空間である。GF との対応は、GF 前室の真上に上層居室階の前方居室、同ベッドルームの真上に階段室、後室の真上に後方居室が位置するという関係になる。おそらくこのユニットが最も原型に近いものであり、そのほか居住者の人数や構成、一部を倉庫化するなどその時々の条件に応じて、前方・後方居室を基本とする 2 単位がさらに分割されていくものと推測される。

可変性が高いという以上のような上層階平面構成の特徴が、現状ではきわめて改変が多く、かつそれぞれの原型をさかのぼれない理由であると考えられる。

しかし逆にいえば、11 都市の都市住宅における上層居室階はそもそも、都市生活にかかわる居住やストック機能のさまざまな変化や条件を吸収するバッファーゾーンのような空間であると指摘できる。

〔各都市に特徴的な住宅のありかたについて　−ヒンデローペンを中心に−〕

11 都市の住宅には以上のとおり一定の共通類型が指摘できるという見解のうえで、都市ごとに特徴的な住宅建築の様相についても述べておきたい。

都市固有の特徴がまずはっきり看取されるのはヒンデローペンである。ヒンデローペンの住宅は、おおむね一列三室型およびエントランスホール＋1 室（2 室）型のバリエーションによって理解することができそうであるものの、S 字型の廊下をもつバプティスト会修道士の家〔Nieuwstad 12〕や、主屋に付属する美しい離れ〔Nieuwstad 22〕“Lik hu□s -小さな夏の家”、港と運河をつなぐ閘門の管理に関わる家〔Sluishuis〕、さらに付属屋を主屋の隣に並べて配置するという他都市にはあまりみられない配置構成など、個性的な建築群がみいだせる。ヒンデローペンの文化圏が他の 11 都市とは異なり、北欧など外洋の経済圏に位置付いていたことなどともあわせて、今後とりわけ詳しい検討が望まれる。同様に他の都市についても、各都市の成立時期や街区構成、社会経済的特性などと関係付けた住宅の特徴の発見的解釈が期待される。

3.2 近世-近代期フリースラントの都市社会と居住

3.2.1　はじめに

（1）　目的と先行研究

本節では主に経済史分野で活用されてきた文献史料（後述）と、これまでの本研究会にて用いてきた地籍図・地積台帳史料および実測調査成果を重ね合わせることで、近世-近代期における都市の社会的側面を空間史から考察することを目的としている。本分析作業は今年度末からはじめた社会と空間とを接合する試みの端緒であり、まだ議論は十分熟したものとはいえない。そのため、本節の考察はいくつかの素材や事例を通してみた若干の成果であることをはじめにお断りしておきたい。

さて、近代オランダ経済史については多くの研究や著作があるが、本研究と密接に関わる研究として以下の二つがあげられる。ひとつは近世-近代期フリースラントを対象としたファーバー（J.A.Faber）による研究書 *”DRIE EEUWEN FRIESLAND — Economische en sociale ontwikkelingen van 1500 tot 1800”*（『フリースラントの三世紀—1500-1800 年における経済および社会発展』）[3]である。ファーバーは人口史と物価史を軸としてフリースラントにおける長期トレンドを解明し、農村部地域 ’Grietenij’および都市 ’Stad’における職業・産業構造や経済的生活水準の実証的な分析を通してフリースラントの全体史を叙述している[4]。農業史や農村社会史的な側面が強いが、とくに職業や産業構造については都市と農村の関係を構造的に捉えており、本研究会でも学ぶところが多い。また本書は論文と補遺の二冊組みであり、補遺に収められている本論を補完する図表群[5]はフリースラントの地域構造を把握するうえで重要なものといえる。さらに、フリースラント史料の解題や史料批判は、史料を扱うための指針として意義深い。

二つめに、近年翻訳された総合的かつ包括的な近代オランダ経済史通史の『最初の近代経済—オランダ経済の成功・失敗と持続力 1500-1815』[6]があげられる。本書の功績を訳者の言葉を借りて述べれば、つぎの四点に特徴がある[7]。①.オランダ各地におけるワーヘニンゲン学派の実証的成果を総合したこと。②.工業や貿易といった多彩な研究分野の最新成果を統合し、一つのイメージを提示したこと。③ 従来手薄であった金融・財政といった分野を新たな研究で補完したこと。④. ①-③をふまえ都市-農村関係や労働市場、生活水準の分析を通じて体系的な総合史を組み上げたこと。ここでは詳細に踏み込むことはしないが、オランダにおけるフリースラント地方の相対的な位置づけを考えるうえで示唆に富むものといえる[8]。

（2）　史料—18-19c センサス史料と 18c 財産史料

本節の分析史料として、18-19 世紀センサス’Volkstelling’史料、19 世紀地積図および地積台帳史料[9]、また補助的に 18 世紀財産史料[10]や絵図史料を用いる。以下、センサス史料について概略を述べる。

センサス史料は、1795 年[11]から定期的にオランダ全体で実施された国勢調査の記録である[12]。またそれら定期的な全国調査以外の年に地域ごとで独自に行われている場合もある。本分析が対象とするボルスワルドもそのひとつである。

史料は都市 ‘Stad’・農村部地域 ’Grietenij’ごとに作成されており、都市は ’Kwartier’や ’Wijk’、’Espel’ といった都市内の行政区域ごと、農村部地域は集落’dorp’ごとに情報が整理されている。そして、それぞれ家屋ごとに家族や使

---

[3] Johannes Alle Faber, *“DRIE EEUWEN FRIESLAND — Economische en sociale ontwikkelingen van 1500 tot 1800”*, DeelI, II, [A.A.G. Bijdragen 17], Wageningen, 1972.

[4] *Ibid*, pp.399-400.

[5] *Ibid*, Deel II.

[6] J・ド・フリース、ファン・デァ・ワウデ共著、大西吉之、杉浦未樹共訳、『最初の近代経済—オランダ経済の成功・失敗と持続力』名古屋大学出版会、2009 年。（蘭語版：”*Nederland 1500-1815: de eerste ronde van moderne economische groei*”, Balans,1995、英語版：”*The First Modern Economy：Success, Failure, and Perseverance of the Dutch Economy,1500 -1815*“,Cambridge University Press,1997。蘭語・英語版ともに著者が執筆。訳書は英語版を底本としている。）

[7] 前掲書、2009 年、p.685。

[8]「ワーヘニンゲン学派」は 1950 年代なかばからワーヘニンゲン農業大学（現ワーヘニンゲン大学）でスリッヒャー・ファン・バート（Slicher van Bath）を中心に結成された地方史学科の研究者集団である。アナール学派の影響が強く、構造主義的なアプローチから近代初期オランダ農村部の発展を解明してきた。本節で取り上げた著者ファーバーとファン・デァ・ワウデはともにワーヘニンゲン学派の歴史学者である。二著の研究方法論の基礎はともに同じものであり（後者は、アナール学派的な方法論と共著者によるクレオメトリックスと呼ばれる緻密な数量分析と新古典派理論を特徴とする方法論とが組み合わされている）それぞれの研究成果を連続的に捉えることができる。

[9] 地籍台帳情報については昨年度同様、デジタルアーカイブである HISGIS（http:/www.hisgis.nl/）を利用。詳細については 2010 年度アニュアルレポート（代表 伊藤毅「都市インフラ調査研究・ヨーロッパ」）を参照されたい。

[10] A. van Dalfsen en P. Nieuwland,”*DE QUOTISATIEKOHIEN Namen, beroepen en welstand van de Friese bevolking in 1749*”,Fyske Akademy, 1985.を利用。この史料は課税方法＝行政収入をオランダ全土で統一的に制度化するために都市・農村部地域ごとに調査された記録を 18 世紀の数学者 Ypey がまとめた二次史料である。（*Ibid.*, A. van Dalfsen en P. Nieuwland ,1985., pp5-15.）1511-1794 年におけるフリースラント全域の職業構造を把握できる史料は存在しない。（*Ibid.*,J.A. Faber, 1972, pp99 -100）

[11] オランダ共和国[1580 頃-]は 1794 年にフランス軍に侵攻され、1795 年フランスの衛星国としてバタヴィア共和国が成立している。これを期にはじめて全国的な国勢調査が執り行われた。ただし、フリースラント地方のみ他地域より実施が遅れ 1796 年 1 月と 2 月に実施された。（*Ibid.* 1972,pp.40-41）

[12] 1795-1971 年までの国勢調査データは、オランダ科学情報機構 the Netherlands Institute for　Scientific Information Services（NIWI-KNAW）”によってインターネット上で公開されている。上記デジタルアーカイブは、1997 年から実施された三つの共同プロジェクト—「Life Courses in Context」「Preparation of Dutch Census Data 1795-1971」「Digitalization of Dutch Census 1795-1971」—の成果である。（Volkstelling 1795-1971：(URL) http://www.volkstelling.nl、2012 年 4 月 6 日）ただし、閲覧可能な情報は都市・農村部地域・州ごとの統計的なデータのみに限られている。

用人の情報が記載されている[13]。地域ごとで多少の差異はあるが、以下に基礎事項をあげる。

a) 氏名'namen / voornamen'
b) 地区記号'wijknummer'
c) 住居番号'huisnummer'
d) 婚姻歴' burgerlike staat'
e) 職業 'beroep'
f) 生年月日（年齢）'geboorte dag / -maand / -jaar'（'jaar'）
g) 宗派 'religie'

巨視的には都市の職業構造の把握が可能である。また、地籍図に描かれた家屋との対応関係がわかるため詳細な各家屋の構成人数など空間的な考察も行える[14]。

本節では対象としてはボルスワルドを扱う。ボルスワルドには 1830 年の全国調査以外に、1827、1831、1832、1833、1834、1837、1842 年の計 8 回のセンサス史料が残されており地籍台帳史料との照合や居住者の通時的な動向を追うことが可能である。これらはボルスワルドが独自に調査したものであると考えられる。ただし、それぞれに記載された情報には年ごとに細かなばらつきがみられ、おそらく調査基準が異なっていると想定される。子細な史料批判は今後の課題としたい。

3.2.2　19 世紀ボルスワルドの社会＝空間構造の一考察

ここでは都市居住者の職業分布から都市社会の様相を空間的に概観し、センサス史料や地籍台帳史料から得られる情報をもとにいくつかの事例をとりあげて、都市の社会＝空間構造の一端をうかがう。以下、（1）行政・司法職、（2）商人、（3）織工・労働者に焦点をあて考察を行う。

(1) 行政、司法職・自由業

行政・司法にたずさわる人々は「市民層'burgerij'」のより上位の社会階層であった[15]。行政府の高官や自由業者（医師や公証人、弁護士などは高所得者層の市民であり、とくに市長や評議員などの政治を動かす高位者は政治的な特権階級を構成していた。ボルスワルドにみられる社会の上位に位置する政治的な主導層＝世俗的権力者には以下のような職種（人数）がみられる。

Stadsmajoor［市長］(1)・Stadssecretaris［市の秘書官］(1)・Notaris［公証人］(3)・NotarisKlerk［公証人事務］(1)・Rijkscommies［国の税関人］(1)・Vredergter［判事］(1)・Grietenijbode［農村部地域の執行官］(1)・Rijksontvanger(Bolsward/Tjerkwerd)［国の収税人］(2)・Deuwaarder［廷吏］(1)・Advocaat［弁護士］・Barbier［外科医］(4)

市長'Stadsmajoor'や判事'Vredergter'などの行政・司法関係者が 1 人ずつ、地域の収税関係者や自由業者（公証人'Notaris'・医師'Doctor'／外科医'barbier'）などはそれぞれ 2-4 人と複数人が居住していることがわかる。

つぎに［図 3.2.2.1］は彼らの居住地分布を示したものである。全体としてはボルスワルドの中央運河沿いに居宅をもつ場合が多い。また東側の運河と平行し、西へと延びる通り沿いにも多くみられる。いずれも運河に向けて間口を持った住宅であり、なかには奥行きの深い屋敷地も目につく。つづいて職種ごとに特徴をあげれば、公証人は東側の運河沿い、市・行政関係者は運河の屈曲部西側、収税関係者は水門や市門に近い土地に居住していることがわかる。ここからは典型的な近世オランダ都市における主要運河や道の都市の「表」としての側面がうかがえる。

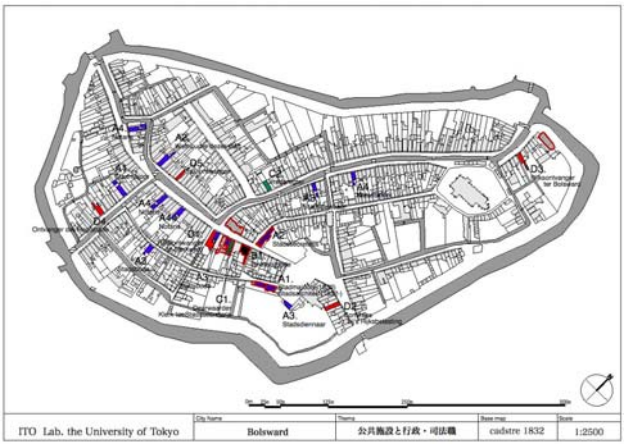


図 3.2.2.1　公共施設と行政・司法職の居住地

さて次に建築的な側面から考察する。［図 3.2.2.2］は公共・宗教施設や都市有力家の館であったスティンズをマッピングしたものである。運河中央の屈折点に市庁舎'Stadhuis'が立地し、通りをはさんだ南側に農村地域庁舎'Grietenijhuis'や裁判所'Rechthuis'が建っている。さきにみた行政・司法関係者が居住する地区には公共施設が集中しているのである。また地域司法行政執行官'Grietenijbode'や市の秘書官'Stadsecretaris'はセンサス史料によれば、これら公共施設に住み込みで働いているのであろう。

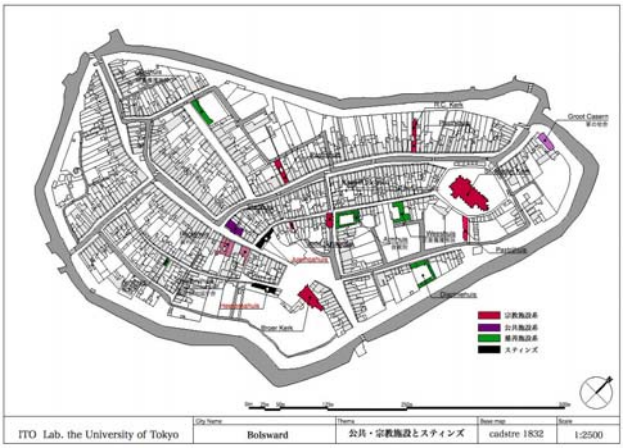


図 3.2.2.2　公共施設とスティンズ

スティンズとは中世後期にエリート層を構成した Hoogdeling（以下、ホーフデリンフ）[16]が建てた石造の館のことを指す。この時期、フリースラントでは内乱が起きるようになり、おそらく 12c ころから人命や資産を守るための防御機能をもった館＝スティンズが建設されるようになった[17]。宗教改革以後はその防御機能が不必要となり、有力者の居館として使われた。通常スティンズは農村部に立地していたが、都市に居住する場合もあった。ボルスワルドには都市有力者であったユーウィンガ家'Juwinga'と

[13] 性別や血縁関係はセンサス史料からは読み取れないため、必要に応じて出生・婚姻・死亡記録を用いた。フリースラントにおける上記記録はフリースラント歴史文学センター（Tresoar）の HP（http://www.tresoar.nl/）上でデジタルアーカイブが利用可能である。アーカイブは大きく 1811 年以後と以前とに分かれており、前者は行政史料、後者は教会や修道院史料、行政史料をもとに収集されており 17 世紀ころまでの情報がみられる。
[14] HISGIS には地籍図情報に、一部の都市や地域に限りセンサス情報が重ねられており、両史料の対応関係は Web 上で閲覧が可能である。本分析では 19 世紀のセンサス史料の情報はこのアーカイブを利用する。
[15] 以後、合社会階層に関する記述については、とくに注記しない場合、前掲書「11 章 都市と農村—近代経済の社会構造」（J・ド・フリース、ファン・デァ・ワウデ共著、2009 年）を参照。
[16] 中央集権的な権力の存在しなかったフリースラントにおいて武装化し自治を行った在地権力。富農と訳すこともある。4.1.5(1)、4.2.2(6)参照。
[17] Provincie Fryslan, *"De Wordingsgeschiedenis van Fryslan"*,2009.

ヘーレマ家'Heerema'ふたつのホーフデリンフが居住していた。ユーウィンガ家は 14c ころ市庁舎の西側に、ヘーレマ家は少なくとも 15c ころまでに南東部の都市のへりにスティンズを建設し居住した［図 3.2.2.3］[18]。その居館は絵図や地籍図でみられるように、他の住宅より規模も大きく、館の後背地には大きな土地を持っていた［図 3.2.2.4］[19]。ホーフデリンフの子孫ではないが、センサスによれば、ユーウィンガ・ハイス'Juwinga-huis'には市の秘書官、ヘーレマ・ハイス'Heerema-huis'には市長が暮らしている。

図 3.2.2.3　ユーウィンガ・ハイスとヘーレマ・ハイス

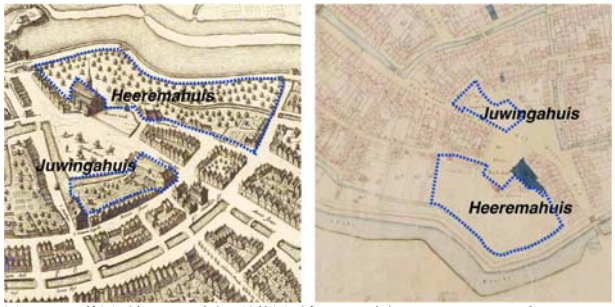


図 3.2.2.4　絵図（左、1616 年）・地籍図（右、1832 年）にみるスティンズ

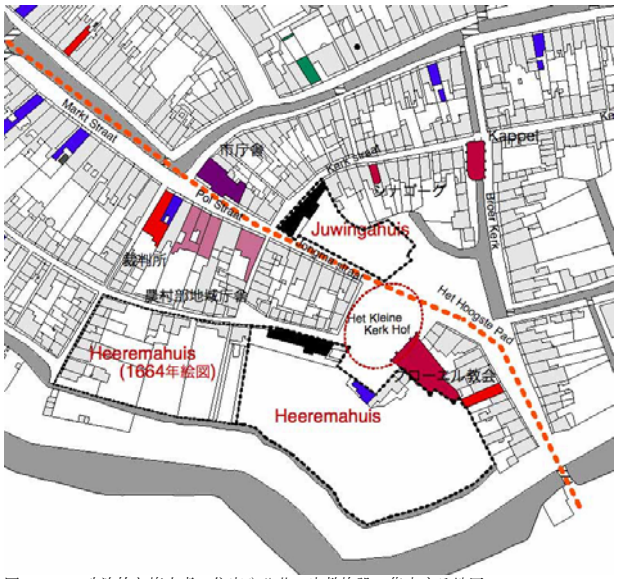


図 3.2.2.5　政治的な権力者の住宅や公共・宗教施設の集中する地区

以上を踏まえると、大きくは運河沿いとそれから分岐し東西にはしる道沿いに世俗権力者の家が立地していた。そして行政・司法といった政治的な権力者の住宅や公共的な建築は都市南東部の［図 3.2.2.5］の地区に集中していた。この地区は街区や水路、道などで表象される明確な領域を持たない。しかし、歴史的にみるとブローエル教会'Broer Kerk'、広場、二家のスティンズ、そして行政・司法関係の施設と多くの都市権力をもつ建築群が集積している。つまり、小中規模の土地が結節することで一つの核となる場所を形成していたことになる。さらに、地形的にみてもテルプ''Terp'上に位置しており、空間的なアプローチからも考察する可能性を残している。

(2)　商人

都市における市民層の大多数は卸売業者や小売業者、職人層である。以下はボルスワルドに居住する上記に該当する職の種別の一部である。

Koopman［商人］・Winkelier(-sche)［店舗商］・Boekverkoper［本屋］・Tapper(-sche)［ワイン小売り］・Wijnhandelaar［ワイン商］・Grutter(-ij)［食料雑貨商］・Gortmaker［穀物挽屋］・Smid（鍛冶屋）・Zilversmid［銀細工職人］・Shoenmaker(-ij)［靴職人］・Kleermaker［仕立屋］Horologiester(Uurwerkmaker)・Wagenmaker［荷車職人］・Blikslager［ブリキ職人］・Koperslager［銅細工職人］・Leerloijer［皮革職人］・Korfmaker［バスケット職人］・Zadelmaker［馬具職人］・Potterbakker［陶工職人］・Wagenmaker［荷馬車製造業］

ここからは 17-18c にかけて「特化（専門家）'specialisatie'」した職分の様相がうかがえる。センサス史料や地籍台帳史料をもちいた職業分布では幅広い市民層の社会階層を考察するには限界がある。そこで、ここでは職人や製造業者、宿屋などを除く狭義の「商人」—コープマン'Koopman'[20]、ワイン商'Wijnhandelaar'、ワイン小口売商'Tapper'、店舗商'Winkelier'、食料雑貨商'Grutter'—を対象として都市における居住分布を考察する。つづいて、複数の土地や倉庫をもつ（おそらく比較的所得が多いと想定できる）コープマンに着目し、商人の社会を空間的に読み解いてみたい。

［図 3.2.2.6］は上記「商人」の居住分布である。また同系色のものは同職種であり、そのうち居住者が土地持ちか否かを示している。まず目を引くのは中央運河沿いに立地するコープマンの住宅群である。住宅の間口も大きく奥行きも深いものが多い。恐らく中規模なタウンハウスが建っていると考えられる。さらにコープマンは土地持ちが多いことも注目される。一方、店舗商も都市全体でばらつきはあるものの、コープマン同様、運河沿い—とく中央運河から南へと折れる水路沿い—に多く居住している。コープマンの住宅に比べると規模は小さい—間口が狭い、あるいは方形で奥行きが浅い—。また、非土地持ちの店舗商はホーフストラート'Hoogstraat'など狭小の住宅に分布している。

[18] P.N.Noomen, "*De stinzen in middeleeuws Friesland en hun bewoners*", Hilversum Verloren,2009 付録 CD。

[19] 1837 年の地籍図によれば、ユーウィンガ・ハイスの屋敷地は、南側に間口をもつ街区へと改造されている。またヘーレマ家の土地も分割され、背面には狭小住宅が建ち並んでいる様子がうかがえる。ユーウィンガ・ハイスは二枚の地籍図が描かれる期間の間に解体され、ヘーレマ家はその後農家となっている。すなわち、19c 初頭はボルスワルドの二つのスティンズが有力者の館として使用された最後の時期にあたると考えられる。

[20] 'Koopman'の訳語は商人であるが、本節で広義に使用する「商人」という語との区別のため、コープマンと呼称することにする。

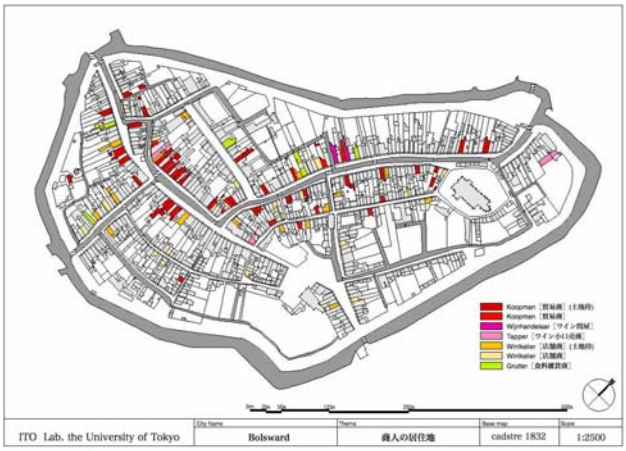


図 3.2.2.6　商人の居住地分布

つぎにコープマンの土地所有分布をみていき、コープマンを事例に商人社会の具体像を若干考察する。

都市内の土地所有状況をみていくと、ボルスワルドでは以下の 4 類型に土地所有者を区分できる。

α.単筆型—都市内の土地一筆を所有。
β.集積型—隣接あるいは地先、後背部の土地を複数所有。
γ.離散型—都市内外で離散的に土地を所有。
δ.不在地主型—都市外や他都市の人が土地を所有。

都市全体としては類型 α - γ が多く、類型 δ が最も少ない。類型 β は大規模な集積地をもつことはなく、2-3 筆程度の集積に限られる。一方、類型 γ の持つ土地種別は狭小宅地から母屋の建つような比較的大きな宅地までと多様で、たいていは 2-3 筆程度だが、多い場合は 5-7 筆程度持っている地主も存在する。さらに類型 β と類型 γ の複合型（以下、類型 β＋γ と表記）といえる土地所有者も存在する。

［図 3.2.2.7］は土地持ちのコープマンの土地所有状況を示したものである。また同図にコープマンが所有する倉庫'Pakhuis'もプロットした。コープマンは類型 α と類型 β が最も多い。残りは類型 γ や類型 β＋γ である。類型 β や類型 γ の土地利用をみると、倉庫のための他所地とするもの、借家経営を行うものの二つがうかがえる。倉庫の立地は近接あるいは後方の土地に置く場合と比較的離れた場所に置く場合とがみられる。とくに地主 A［図 3.2.2.8］や地主 C［図 3.2.2.9］からは水路をまたいだ地先的な土地利用・所有や水路際に立地する倉庫などから水路との関係性の強さがうかがえる。

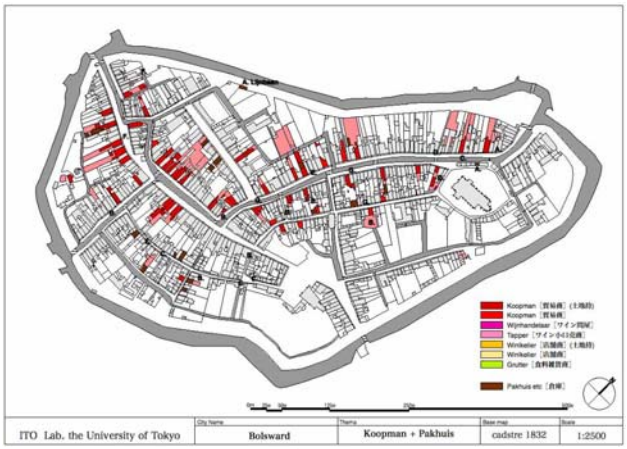


図 3.2.2.7　コープマンの居住地と土地所有分布

図 3.2.2.8　地主 A の地所

また商人のなかでとくに目を引くのは地主 B［図 3.2.2.10］についてである。土地台帳史料によれば地主はユダヤ商人・Salomon Levy de Jong である。彼は類型 β 型の土地所有者で、都市内に 7 つもの土地を所有している。そのうち 1 地所（倉庫が立地）以外にはすべて住宅が建っている。センサス史料からは、その借家には家族や親族が多く住んでおり、Moses Salomon de Jong や Ysak Eliazar de Jong らは Salomon Levy と同じくコープマンである。また他にも血縁関係がない人も多く暮らしている。

「商人」、とくにコープマンは都市の主要運河沿いに多く居住していることがみてとれた。また彼らの住宅規模が比較的大きいこと、そして土地を多く所有していることからは富裕な市民層であることが想像される。また、ユダヤ商人の事例からは、富裕な商人の「家」の問題や土地経営者としての商人の姿が垣間みられる。これらの詳細な検討については今後の課題としたい。

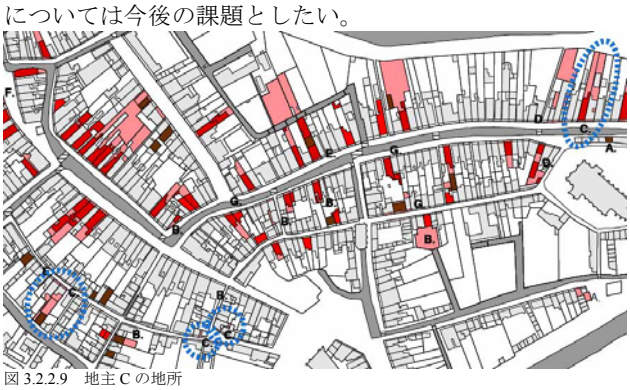


図 3.2.2.9　地主 C の地所

図 3.2.2.10　地主 B の地所

(3)　織工・労働者

さいごに織工'Wever'や労働者'Arbeider'、'女性裁縫師'を事例として市民層の下位にいると考えられる諸集団の都市における居住の類型を簡単にスケッチしておく。［図 3.2.2.11］は上記職業の居住分布をしめしたものである。彼

らの居住する住宅類型は公共的な施設、狭小住宅、タウンハウスの上層階の大きく三つにわけることができる。

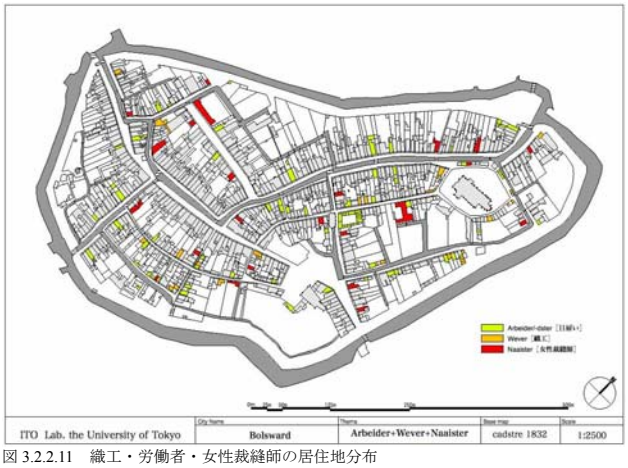


図 3.2.2.11　織工・労働者・女性裁縫師の居住地分布

公共的な施設とは慈善施設'Gasthuis'や救貧院'Armhuis'、孤児院'Weeshuis'などの社会福祉的な施設や市の所有する狭小住宅群であり、とくに慈善施設には女性裁縫師の数が多くみられる。つぎの狭小住宅は幅 2-3m 程度の間口の狭い住宅や都市の周縁部や路地に表間口をもった小規模な住宅である。地籍図からは運河沿いにみられるタウンハウスと比べて、その規模がとても小さいことが容易にわかる。これらには労働者や織工など居住しており、センサスから居住構成人数をみると 2-6 人と高密度な居住環境であることがうかがえる。さいごはタウンハウスの上層階である。センサスによれば居住地はタウンハウスであるが、土地は所有していない。これは居住者が間借りあるいはアティックなどの上層居室階に住んでいると考えられる。3.1.4 でみたように、調査家屋の上層居室階の復元は極めてむずかしい。しかし、センサス史料などで、ここで取り上げたような社会の下層民の居住のあり方を考察することは都市の社会構造を理解する重要なキイとなるはずである。

4.　都市組織・地域分析

4.1 フリースラントの地域形成史

4.1.1　　はじめに

本節ではフリースラントにおけるテリトリオ論展開のための前提として、州規模での地域形成の過程を追い、テリトリオの構成要素の整理と考察を行う。次項以降の記述は『De Wordingsgeschiedenis van Fryslan』(主題ごとに見るフリースラントの起源)を参照し、我々の知見を加えたものである。

(1)　『De Wordingsgeschiedenis van Fryslan』

まず、ここで参照する『De Wordingsgeschiedenis van Fryslan』について記す。本書はフリースラント州が 2003 年から進めるプロジェクト「CHK(Cultuurhistorische Kaart 文化歴史地図)」および「CHK2(Doorontwikkeling Cultuurhistorische Kaart Fryslan　フリースラント文化歴史地図の深化)」の中間報告書として 2007 年にフリースラント州が作成した。CHK は開発・修景・保存等様々な目的に寄与するフリースラントの地図を歴史的観点から作成することを主旨とし、その成果地図はフリースラント州の HP にて web 閲覧が可能である(www.fryslan.nl/chk)。

本書はフリースラントにおけるランドスケープの形成過程を先史時代から通時的に著したものである。そこではフリースラント特徴的なランドスケープを決定した要素に注目することで主題を設定し、それによって現在までを 7 つの期間に区分している。そしてそれぞれの期間におけるランドスケープの形成過程とそれを創りだした人間の営み・その背景とが、既往の研究をベースに描かれている。さらに時代ごとのランドスケープ形成が州規模で空間的に把握できるように、主題地図と呼ばれるフリースラント州の地図が作成されている。

本プロジェクトは様々な分野の専門家にからなるプロジェクトグループにより実行されており、次のメンバーから構成される。Marina Fermo (プロジェクトリーダー), Annelies Hartman (プロジェクト秘書), Saartje de Bruijn, Bertus de Jong, Gilles de Langen, Kees van Stralen, Hinko Talsma, Catrien de Vries, Dolf van Weezel Errens, Cor de Wit, Welmoed Wijtzes, Jessica de Wolff。

(2)　テリトリオ構成要素の整理方法

上記の研究に依ってその時代区分に従いながら、次項以降、フリースラントのテリトリオの構成要素を記述することで地域形成史を追っていく。上記研究を参照しつつ、ここでは以下の 3 段階にテリトリオ構成要素を整理している。

- 与条件：自然条件を基本とする介入の前提となるもの。
  土壌／海洋／洪水／沈殿／再湿地化／湖沼の発生等
- 営為：与条件に対応する人の営み・介入。
  宗教・世俗・都市権力／農業／産業・貿易／技術
  ピート開拓／テルプ・堤防・水路建設／干拓等
- 結実：営為の結果生じる物理的形状。便宜的に直接的なものと複合的なものに二分。
  単結実－堤防／水路／建築物／土地利用／風車等
  複結実－居住地(dorp・vlek・stad)／広域区分(Grotenij・Geemente)／堤防・運河システム／等

以上の 3 分類は相関関係にあり、営為・結実の結果、新たな与条件が発生するなど、通時的にみれば循環することとなる。また、営為と一括りにしているが、そこでは複数の要因と行動が重なりあう、複雑なレイヤーが形成されていることは想像に難くない。ここでは地域への物理的な介入を明らかにすることを関心の中心とすることで、できるだけ簡潔に記述することに努めることとする。

以上の整理と、『De Wordingsgeschiedenis van Fryslan』に描かれる主題地図を用い、フリースラント前近代(16C 中頃まで)の地域形成史を追っていく。

なお、フリースラントにおける宗教権力と居住地との関係については、その重要性から別途節をたてるため(4.2)、本節では省略している。

4.1.2　　フリースラント大地の形成　―銅器時代

この期間はフリースラントに恒常的集落が形成される以前にあたる。そのため、本項の記述は、長久の時間のなかで、どのような自然要因により、どのような地形が形成されるに至ったかが中心となる。つまり、前項での整理における与条件を示す。

(1)　与条件

数十万年もの期間にまたがり、徐々にフリースラントの国土は自然条件により形成されていく。その詳細を個々に記すことは当然できないが、後の地域形成を強く決定づける土壌形成に限れば以下のように抽出することができる。

- 更新世(37 万年前－1 万年前)
  全土は氷に覆われ、氷床の運搬により砂質土壌(デクザント・漂礫土・モレーン)が形成される。
- 1 万年前－5500 年前
  氷が溶け海面が上昇、ピート（泥炭）が形成される。

- BC3000－BC2000
  ピートが拡大していく。
- BC2000－BC800
  ピートの拡大は続き、フリースラント全域を覆うに至る。また、塩性沼沢(kwelder)が形成される。

この結果、フリースラントの大地は以下のように土壌質に分類できる。

①最も古いランドスケープ地域。南部・東部。地表面（近く）が漂礫土(keileem)。Gaasterlan の漂礫土(keileem)のプッシュモレーン(stuwwal)含む。

②デクザント(dekzand)に覆われ、ベークダル(beekdal)に分断された漂礫土(keileem)地域。Tjonger 川や Linde 川の流れるドレンテ高地の丘陵地帯など。

③フリースラント北西部。広い海洋粘土地域。塩性沼沢(kwelder)の形成に起因。

④北東部の Lauwersmeer と南西部の Gaasterlan の間の広い帯状地帯。もっとも低い地域「低地中央部(Lage Midden)」。フリースラントの湖のあるあたり。砂層・粘土層の上に厚いピート層を形成。

この分類の内、フリースラントの国土の大半を占めることになるのが③塩性沼沢地域と④ピート地域であり、その境界にはクレイオンピート(klei-op-veen)という下層にピート、上層に粘土という土壌地域が存在する。また、塩性沼沢地域には高地部(塩性沼沢堤防)と平野部(塩性沼沢平野)がある。

(2)　営為

フリースラントに初めて人が足を踏み入れたのは、石器時代初期(10 万年前－5 万年前)とされ、狩猟・採集を行なっていた。約 6000 年前になると焼畑による農業が確認されるようになり、後に鋤・鍬による恒常的な農地へと発展する。入植地は乾いた砂質土壌であり、海岸地域に恒常的な居住地が形成されることはなかった。

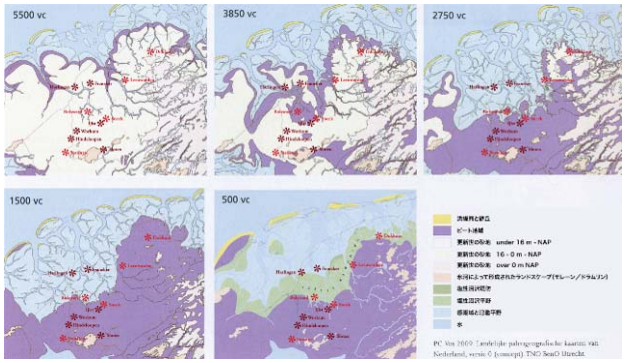


図 4.1.2.1　フリースラントの土壌形成過程(『De Wordingsgeschiedenis van Fryslan』所収図版を加工し作成。以下本節の図版は同様のため出典を省略する。)

4.1.3　　テルプ建設の隆盛　鉄器時代—中世初期

鉄器時代に入ると、ピートの拡大、塩性沼沢地の発展に伴い、乾燥した砂質土壌がますます減少していく。さらに農業の発展が伴うことで、肥沃な粘土のある塩性沼沢地に人が入植していく。さらに王国権力や宗教権力がフリースラントに及び、国際貿易への参加が始まるなど、様々な営為の萌芽が見られ、地勢への介入が開始される。

(1)　与条件

この時代においてもピート形成が続いている。一方で、北西部では肥沃な粘土地質の塩性沼沢(kwelder)が発達し、徐々に定住地化が進んでいく。

(2)　営為

塩性沼沢(kwelder)地域での定住が始まるのは BC600 年頃以降であり、初めはその高地部に、その後平野部にも居住地が形成されていく。BC1 世紀ころになるとピート境界地域への開拓も開始される。

紀元 0 年から AD300 年頃までのフリースラントはローマ帝国の支配下にあり、影響を受けたと思われるが、具体的には分かっていない。AD3 世紀後半から 4 世紀後半まで、おそらくは民族大移動に影響され、塩性沼沢(kwelder)地域から人がいなくなるが、4 世紀後半から塩性沼沢(kwelder)地域への再入植が行われている。

6 世紀終わりから 8 世紀には、ユトレヒトを中心とするフリースラント王国が存在し、高級品の長距離貿易が始まる。Dorestad 貿易への参画、エンポリアと呼ばれる交易の中心地が発生するのもこの時期である。しかし、王国の中心からは離れていたため、フリースラントではその影響は限定的であったとされている。

734 年、フリースラントはフランク王国の支配下に入り、キリスト教が伝来する。キリスト教はこの後、ランドスケープ形成の観点からも非常に大きな意義を持つため、前述のとおり、別の節に譲る。8 世紀－9 世紀にはエンポリアが地域市場として機能を持ち始め、フリースラントではスタフォーレンがそれにあたる。ただしいまだ限定的であったため、ランドスケープへの介入は見られない。

この時代を通じて、人の介入として確認されるのがテルプ建設である。粘土地域では、エリートによる交易地あるいは農耕居住地としてテルプが建設される。常に浸水の危機に迫られる低地において、人工的に微高地を形成するテルプは定住のために必要不可欠であった。

また BC 1 世紀以降には、ピート地域の境界部分の開拓に伴い、排水のための溝(sloot)や堤防(dijk)が造成されるようになる。

(3)　結実

数多く建設されるテルプだが、それが造成される土壌により形状・土地分割の方式が異なっている。現在では、放射状に土地分割されたものが知られるが、塩性沼沢堤防ではブロック状に土地分割されるものも建設される。また、クレイオンピート地域・ピート地域では、排水の必要性からより広い土地区画を必要とした。

ピート開拓地域の乾燥を保つため排水を行う溝(sloot)と堤防(dijk)だが、大規模な洪水に耐えるものではなく、常に維持管理の必要があった。そのため、溝や堤防によって決定される土地区画は、この時代にまで遡ることはできない。

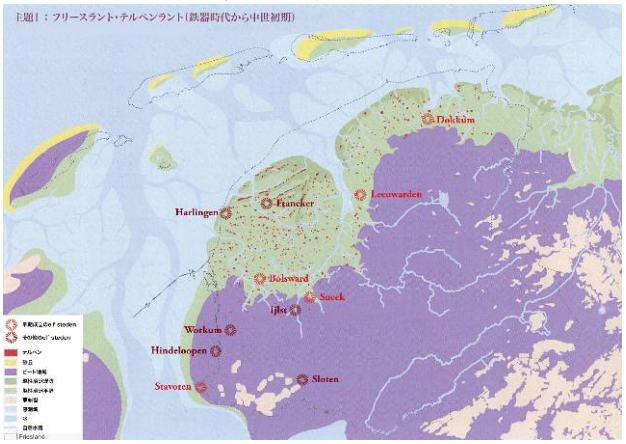


図 4.1.3.1　中世初期以前のフリースラントの土壌分布とテルプ分布

4.1.4　フリースラントの基盤形成　9—12C 中庸

(1)　与条件

この時代においても、海の影響は非常に大きく、それに対抗する措置を講じなければならなかった。一方で、前時代よりも規模の大きいピート地域の開拓に伴い、その排水に起因する地盤沈下が起こり、干拓地域や塩性沼沢地が再湿地化するという事態が生じた。

(2)　営為

キリスト教権力が着実に勢力を強めるなかで、ピート開拓や堤防・水路・教会道の建設といったインフラ整備において、教会が指導的な役割を担い始める。

産業面においても、9－10 世紀ごろには、かつての高級品ではなく、木材・石材など生活に不可欠な商品を扱う地方市場が成立する。結果、輸送や積替に対する従事者の需要が拡大する。これらの市場には、教会近傍にてその保護下に入るものもあり、そこでは産業が集中し、さらなる発展を遂げる（後述の主要集落(hoofddorp)。また、産業の集約は、他の周辺地域での農業化を促すこととなった。

地域への介入に目を向けると、900 年頃は洪水など海の影響に対抗するため、既存のテルプの拡大が図られる。10 世紀頃には、ミッデル海に対する堤防建設が始まり、その後も漸次、必要性が増し大規模化する。この時代の終わり頃になると既存のテルプを結ぶ長大な堤防が造成される。

また、10C 以降、ピート地域の大規模開拓が行われ、ストライプ状の土地分割が行われる。これに起因する開拓地・粘土地域での地盤沈下に対抗するため、堤防建設や排水能力の向上が確認できる。

(3)　結実

農業・産業の発達に伴い、居住地も多様性を見せるようになる。この時代には以下の集落類型が確認されている。

- 地域集落(streekdorp)
  ピート開拓地域にみられ、短冊状の土地分割が行われる。
- エス集落(esdorp)
  開拓地域において、ピートの沈下・消滅により砂質土壌が隆起する場所に発生。ストライプ状の土地分割ができないために、高地部分を共同耕地(＝es)とする共同分割(esverkaveling)を行う。ストライプ状の土地分割と併存する可能性もある。
- 主要集落（hoofddorp）
  教会の保護のもと、貿易・産業に特化した集落。1000 年頃地域中枢に発展。スタフォーレン・ボルスワルド・レーワルデン・ドックム(以上では硬貨が成立)・スネークなど。
- テルプ集落（Terpdorp）

堤防・排水路については、ピート開拓地域では、開拓地域の再湿地化に伴い、排水を向上する必要が生じた。結果として、11、12 世紀には、開拓方向に直交する水路が掘削され、これは舟運の利便性も向上させるものでもあった。粘土層地域では、再湿地化、ミッデル海・Marne 湾の自然堆積に対して必要が生じ、堤防建設の結果、マザーポルダー(moederpolders)が形成される。マザーポルダーとは地域ごとの堤防によって結果的に形成された、堤防に囲まれた大地であり、その点で最も古いポルダーとされる。もちろん、近代的な干拓計画の産物ではなく、ある種、偶発的に形成された土地ではある。また、塩性沼沢堤防(kwelderwal)を利用する形で形成された環状堤防(ringdijk)もこの時代から見られるようになる。

土地分割については、ピート開拓地域では排水路によって規定されるため、短冊状の土地分割が、粘土地域では微地形に起因する不整形なブロック分割がそれぞれ特徴として現れる。ピート開拓地域での短冊状分割は、ピートを掘り尽した後も維持されることとなる。

図 4.1.4.1　9C－12C 中庸のフリースラントの地勢(土壌、テルプ、ピート開拓他)

4.1.5　構想と闘争　12C 中庸—16C 中庸

(1)　与条件

ピート開拓がさらに大規模化したために、排水に起因する地盤沈下が続く。ついには、ピート開拓に起因する池・湖が数多く形成されるまでに至った。また、12 世紀終りから 13 世紀終りにかけ洪水・嵐が頻発し Lauwers 海・Zuider 海が形成されたことも大きな自然条件の変化である。

(2)　営為

まず権力構造について記す。当時のフリースラントはドイツ帝国の支配下におかれてはいるが、実質的な支配権はほぼ行使されていなかった。中央集権的な権力が不在であったことは、在地権力(grieteman・ホーフデリンフ(hoofdeling))への権力集中をもたらした。彼らは武装・自治を行う集団であり、互いに勢力を拮抗させ、ある種の封建社会がそこには存在していた。在地権力者たちは防御施設・防塁・恒常的な居館として、それぞれスティンズ(Stins)、スティンズヴィール(Stinswier)、ステイト(States) を建設し、現存しているものも多くある。

一方で、宗教においてはユトレヒト司教による強力な司教権力が存在していた。12C 中頃以前に修道院が設立し、1500 年ごろには約 360 もの教会、約 50 もの修道院がフリースラントには存在していたという。修道院勢力は平修士による、耕作、ピート開拓、堤防・水路・堰の建設指導にあたった。また、1453 年には修道院道(kloosterpad)が確立する。これは商人の安全な通行を保障するものであり、最古の長距離道路の一つとして知られる。

貿易・産業面では、フリースラントの都市がハンザ同盟に加盟したことが大きな特徴として挙げられる。1385 年にスタフォーレンが、1422 年にボルスワルドが、1368 年にヒンデローペンがそれぞれ参加した。これは河口干拓・海堤防(zeedijk)建設の結果、内地での交易が困難となったために、外洋への交易を求めたためである。

主要集落(hoofddorp)が地域市場としてさらに発展し、フリースラントに１１の地域中枢が成立する。そしてフリースラント 11 都市へと成長するのである。このことは、さらなる周辺部での農家の増加をもたらした。

また、1200 年頃から海岸地域における煉瓦製造が始まったことも重要であろう。修道院・スティンズ建設のために需要が増大、製造のための窯が普及したことによる。

このような情勢のもと、人間の地域への介入は大掛かりなものになっていく。

ピート開拓地の水環境の悪化に伴い、乾燥した場所・砂質土壌への集落移動が行われるようになる。こうして形成される集落は接道集落(wegdorp)であり、同じ開拓地域に形成される地域集落(streekdorp)とは区別される。

また、ピート開拓地域での水環境悪化に対抗する手段として堤防・排水システムも向上する。早い時期にピート開拓がなされた低地中央部(Lage Midden)の農業用地を再湿地化から守るための堤防システムとそれに囲われる領域が形成される。これらはヘム堤防(hemdijk)・ヘムポルダー(hempolder) と呼称される。また、効率的な排水のため、堰(hemmen)の建設が始まる。前時代のマザーポルダーとは異なり、明確な意図のもと、堤防に囲われた土地を作り出したのである。

また、洪水・浸水に対抗する手段として Slachtedijk に代表されるような内陸堤防(binnendijk)が建設される。これは、海や川に直接面するのではなく、その後背地に存在する堤防であり、複数の堤防からなる防衛システムを形作るものである。

さらに、この時代にはミッデル海・Marne 湾・Lauwers 海など海の干拓が開始される。初期はミッデル海・Marne 湾の自然堆積を契機とする干拓であり、海に並行する小規模な堤防である集落堤防(kadijk)と干拓地を完全に閉じる堤防である横断堤防(armdijk・dwasdijk)の 2 種類の堤防により、徐々に海水を後退させていくものであった。その後、徐々に計画性が強くなり、ついには、16C 初頭に大規模な計画的海上干拓として、Het Bildt の干拓が実行され、ミッデル海は完全に干拓された。

(3) 結実

まず干拓地（polder）についてであるが、ヘムポルダー(hempolder)やミッデル海・Marne 湾・Lauwers 海の干拓を通して、より近代的な意味でのポルダーが形成されていったことは、土地を作り出すという意図のもと、大規模介入が実行されたという点で、大きな意味を持つ。また、この時に造成された堤防の多くは、現在の地域道路として残っているため、当時の海岸線の移動経緯を判読することができる。また、干拓により、それまでの細かく煩雑な地割(不定形な方形や三角形)から、矩形に近くかつ大きい土地分割が可能となった。

すでに述べたように在地権力者の居館としてスティンズ、スティンズヴィール、ステイトが建造され、また 16 世紀初頭には、ザクセン公・ハプスブルク家などの非在地権力が都市内にブロックハイス(blokhuis)と呼ばれる要塞を築くなど、世俗権力を象徴する建築物が出現し始める。修道院とそれに付随する土地(修道院農場(uithof)などや、修道院道(kloosterpad)、干拓・開拓の指揮など、宗教権力もまた大きな影響力を行使している。

最後に居住地についてである。前時代に成立した主要集落(hoofddorp)はこの時代に大きく発展し、フリースラント 11 都市の成立へと至る。都市特権、すなわち経済的特権を取得した時期は、スタフォーレン(11C)、レーワルデン・フラネケル・ドックム(13C)、ウォルカム・ボルスワルド・ハーリンヘン(1400 頃)、スネーク・エイルスト・ヒンデローペン・スローテン(15C)と確認されている。これらの都市では、ウォルカム・エイルストを除き、外濠・堡塁が建設され、後に近代的な要塞化が施される。また、交通・産業の中心として発達したため、中産階級が生じ、既存の在地権力との衝突が生れる。また、フレック(Vleck)とよばれる、都市特権は持たない大規模集落が存在する。これは、17 世紀以前に発展するものと、17-18C に発展するものとに二分される。また、16C 後半ごろ、農村部地域(Grietenij)が成立し、広域の地域区分が決定される。これは 1851 年まで維持され、現在の地域区分であるヘーメンテ(Geemente)の前身となっている。

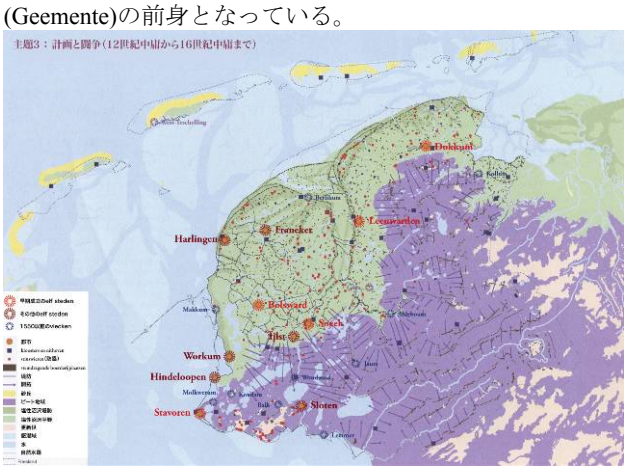


図 4.1.3.1　12C 中庸－16C 中庸のフリースラントの地勢(土壌、都市、堤防、開拓他)

4.1.6　小結と今後の課題

以上、紙面の都合上、細部は省略したものの、16C 中庸までのフリースラント地域の主要素に注目し、形成史を追った。本研究が主たる対象とする時代区分は 16－19C であるため、本節の内容は対象を考察する上での前提としての意味合いが強い。しかし、都市あるいはそれより広い領域を歴史動態として考察するにあたり、本節の内容は重要性を増すだろう。特にテルプ・堤防・水路・ポルダー建設など物理的なインフラは前時代のものに大きく規定され、さらにそれが造成される大地に強く束縛される。また、ある時代に形成された要素は、後の時代の介入を規定する。

本節で整理した地域構成要素を用い、これまでのフリースラント調査の対象都市を、周囲も含めた広域での分析・考察に現在着手している。本報告書には掲載できなかったが、今後の課題として明記しておく。また、ここで扱った時代は 16C 中庸までであり、その後の展開もまた、活字化せねばならないことも付記しておく。

4.2 ボルスワルド―レーワルデンの宗教改革以前における治水と土地干拓：フリースラントの教会・修道院と都市・集落

4.2.1　本節の目的・構成・史料

(1) 本節の目的

フリースラントでは、1680 年に州が水管理委員会[21]を設置する以前、13 世紀から 16 世紀にかけてそれに匹敵する統合的な治水事業を行った主体として、修道院の存在があった。また小教区教会の分離独立と干拓フロンティアの前進には密接な関わりがあった。

[21] Het Wetterskip Fryslân.フリースラント水管理委員会。水管理委員会とは、オランダ全土に存在する水のバランスを制御するための行政組織であり、その管轄する地域をもさす。通常の行政範囲と異なり、排水・流域によって区分がなされる。安定した居住のために複数の村落共同体が協力して治水にあたったことから発展してきた。フリースラントでも 10 世紀から大規模な泥炭掘削にともなって人口が増加し、水害から居住を守るために水管理委員会の萌芽といえる協同は中世より存在した。現在の水管理委員会に直接つながる組織が形成されたのが 1680 年。

中世フリースラントの修道院や教会は、宗教改革時に多くの文書が失われるなどの理由で、詳細が分からない部分もある。しかし土地の造成やインフラ整備は中世の段階から進行してきたし、農村部集落、都市組織の中に中世段階から形成されたと推測される要素は多い。つまり、11 都市を「一群の都市」という概念にもとづき都市間ネットワーク・周辺集落・農地まで視野に入れて研究するならば、都市が成熟し近代的な水管理体制が整う以前に成立した地元組織や治水・干拓技術を理解して調査、分析を行う必要がある。

以上のことより、本節の目的は、2011 年秋に調査した集落を含む地域（主にボルスワルド-レーワルデン間の元ミッデル海であった土地周辺）の中世段階からの形成を理解するために、中世フリースラントの教会・修道院と地域形成について基本的な歴史をまとめ、調査した集落の空間構造を整理することである。

(2)　史料・参考文献

各節、項で主に参照した史料と参考文献を次に示す。

4.2.2　(1),(2)

-Hans MOL & Paul NOOMEN,《**De Ontwikkeling van de Parochiekerken**》〔教区教会の発展〕, Douwe KOOISTRA, Erik BETTEN, Pieter Anko de VRIES eds., *Friesland Verleden,* Fryske Akademy, 2008, pp.73-77.

-G. ter HAAR & P.L. POLHUIS, ***De loop van het Friese water***, Uitgevrij Van Wijnen, 2004.

(3),(4),(5),(6),(7)

-Hans MOL, **《Kloosters in Westerlauwers Friesland 》**, Douwe KOOISTRA, Erik BETTEN, Pieter Anko de VRIES eds., *Friesland Verleden,* Fryske Akademy, 2008, pp.78-83.

- Gert Karstkarel & Dick van der Maarel eds., ***FRISIA Illustrata, Tien eeuwen Friesland en de Friesen,*** , Waanders Uitgevers, 1983-1985.

4.2.3　(1),(2)

-Hans MOL,同前掲.

-Marrewijk, D & A.J. Haartsen, 2002, ***Waddenland Het landschap en cultureel erfgoed in de Waddenzeeregio, Ministerie van Landbouw, Natuurbeheer en Visserij***, Noordboek, 2002.

Provincie Fryslan, ***Streekplan***, 2006.

(3)

- Hans MOL,同前掲.

-上條敏子**『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』**刀水書房、2001 年

4.2.4　(1),(2)

-Hans MOL & Paul NOOMEN,同前掲.

-Noordff Atllas Productuions, ***De Bosatlas van Fryslan***, 2009.

-François HALMA, ‘Grietenij-kaarten’, 1718.〔1664 年の Bernard Schotanus による’Grietenij-kaarten’の複製。Leeuwarden の François Halma によって編纂・改編されフリースラント銀行［de Frieslandbank］から刊行されたもの〕

4.2.5　(1),(2)

-http://www.hisgis.nl/hisgis/Kadaster%201832/gewesten/fryslan/fryslan〔1832 年の地籍台帳をデジタルデータ化したもの〕

-2011 年秋の調査記録

4.2.2　フリースラントのキリスト教化略史

(1) 布教の時代-8ー11 世紀-

フリースラントに対してキリスト教の布教が始まったのは、754 年より少し前であった。フリジア人たちは元々大地、樹木、石を神格化し崇拝していた。8 世紀にフランク王国から布教者たちが来てフリジア人たちの神々を祀る神殿の場所に教会を建て、異教の儀礼をキリスト教の儀礼に読み替えようとしたが、アングロ・サクソン系の布教者はフランク王国の手先とみなされ、なかなか受け入れられなかった。フリースラントへの布教完了を任務として負った元マインツ司教ボニファティウス[22]は、754 年ドックムのテルプの上で異教徒たちを改宗させる信仰確認の儀式を行おうとしたが、フリジア人たちに殺害され殉教者となった。

本格的に布教が進むのは、フリジア人で 792 年に初代ミュンスター司教となったリュドガー[23]の登場以降である。リュドガーはボニファティウスの殉教地ドックムに 780 年頃教会を建設し、巡礼地とした。フリースラントのキリスト教化の完了はおよそ 14 世紀のペスト流行により人口が激減した直後といえる。

長い時間がかかったのは、フランク王国の範囲拡大に対する反感と、西ヨーロッパ世界がデーン人とノルマン人に襲撃[24]、略奪され、混乱状態にあったためである。初期キリスト教会は教会を維持するのが非常に難しく、いったん布教を試みたものの放棄された土地があちこちにあった。

(2) 教区教会の増加-12ー14 世紀-

12 世紀になると政治的安定が戻り、教会は組織化され勢力を伸ばした。Oostergo と Westergo（ミッデル海の東部と西部、図 4.2.2.1 参照）の集落のほとんどがこの頃固有の教会をもつようになったが、人口の少ない東部や南部フリースラントでは、最初は礼拝堂のみが建てられ常駐する司祭がいないこともしばしばであった。

しかしながら、教会を維持し機能させるためには司祭が必要である。教会領が定められ、そこから上がる収益が建物の維持に当てられた。教会領は農地で、収穫物で司祭自身の生活も賄われた。中世における司祭の務めは「聖遺物に仕え、それを守ること」、そして「人々の魂の健康を守ること」であった。つまり教区教会は聖なる神に捧げられた場所かつ司牧（司祭が教会を管理し信徒を指導すること）の中心という二つの重要な性格をもつ場所であった。司牧の中で、教区教会のみが行うことができたのは洗礼と葬儀である。ミサや婚姻は他の教会や礼拝堂でも行われたが、教区民の人生の始まりと終わりは教区教会なしにはありえなかった。

教会を建設し、維持し、ミサなどの儀式を行い、少なくとも一人、時には複数の司祭を養うために収入システムが整備された。十分の一税[25]の他に、付随する負担金があった。十分の一税施行の結果、各農家が自動的に一つの教区教会に所属することとなり、教区の境界はフリースラントの人々にとって第一の強制力のある枠組みとなった。

教会は少なくとも二つ以上の農地財産をもたなくては司祭がおかれなかった。一つは教会そのものの維持のため、もう一つは司祭の生活のためである。寄進は村落共同体、家族、あるいは個人から寄せられることもあった。寄進者は司教に対して寄進した地所の教会の司祭を推挙する権利、いわゆる patronage[26]を保有することとなった。教会

[22] Bonifatius, ca672-754.イングランド出身。745 年マインツ司教に任命される。カロリング朝支配者たち、特にカール・マルテルの庇護、協力によりゲルマニア、フリースラントへの布教を行う。

[23] Liudger, ca742-809.ユトレヒト近郊出身。ザクセン、フリースラントにキリスト教を布教した。

[24]総称してヴァイキングと呼ばれるスカンディナヴィア半島に住んでいた人々。8 世紀から 11 世紀にかけてヨーロッパ沿岸部で交易・植民・略奪を行った。700 年代末頃からフリースラントを略奪した。

[25]十分の一税は、フリースラントにおいては 779 年カール大帝がヘルスタル勅令により施行した。フランク王国に住む全住人が教会に納めるべき税金として定められ、カロリング朝期には司教区（そのサブディヴィジョンである小教区）に支払う税となり、司教が徴税権をもった。

[26] Jus Patronatus. キリスト教会に対して土地（寄進した土地を benefice という）を寄進した者が教会の保護者（patron）となり、教会に対して一定の権利、特に司教の同意を得てその教会の司祭推挙権をもつこと。世襲

建設者も司祭任命に関わったので、その教区において重要な地位を占め、やはり patronage を保有した。
教区教会は、教区民の増加とともに古い教区が小教区に分割され、12 世紀から 14 世紀にかけて増加した。ミッデル海干拓[27]による新しい土地（図 4.2.2.1、緑色の土地、濃いほど古い干拓地）では 14 世紀以降も新しい教会が建てられているが、一般的に 1350 年代には新教会の建設は一段落し、減少に向かった。新しい土地の干拓と小教区分離の関係については 4.2.4(2)で述べる。

図 4.2.2.1　ミッデル海干拓の段階を示した図（De Bosatlas van Fryslan より）

(3) 修道院建設−12〜15 世紀−

カロリング朝期の修道院や教会はフリースラント農村部に地所を所有していたが、10 世紀のクリュニー改革運動によりその勢力を失った。12 世紀になると、フリジア人の有力者は自分たちの土地に日夜神への、また修道院の建設者や保護者のための祈りを捧げる場所として修道院を建設しはじめた。修道院に金品または土地を寄進するか、自分または家族の者を修道院に奉献することで死後の救済がえられると考えられていた。また、彼らたちは人々に一体感を与え、精神的な方向づけの権威として修道院が有効だと考えた。

修道院の立地と創建年代の傾向として、12 世紀のものはワッデン海の島や沿岸に近く、13 世紀から時代が下るにつれて内陸部にも建てられていくということがあげられる（図 4.2.2.2 参照）。これは沿岸と内陸の地質の違いに起因する。ワッデン海の島々は砂丘浜堤列、また沿岸部は粘土質にもとづく塩性沼沢で堆積により堤列状に微高地があり人工のテルプが築かれることによって早くから居住が進んだのに対し、内陸部はピート（泥炭）地域で地盤が非常に軟弱であり中世に燃料として採掘が進むと地盤沈下が起こって排水が困難になったため、内陸ピート地域に居住と農地としての利用が展開するのは沿岸の粘土地域よりも遅かった。

フリースラントのラウヴェルス川西部地域（Westerlauw-ers）では、他地域と比較して中世後期に多くの修道院があった。創建年代は大きく二つの時期に分けられる。12 世紀から 13 世紀に建てられた修道院はおよそ 30 で農村部のテルプ上に建設され、大きな面積の農地を所有し、財力をもっていた。15 世紀に建てられた修道院は、修道院改革の結果 12、13 世紀のものほどの財力をもたず、比較的質素なものであった。

中世フリースラントの修道院は、財力や使役できる平信徒の組織、保有する治水技術の点などから、新しい土地の干拓やダイク（堤防）の維持において重要な役割を果したと考えられる。このことについては 4.2.3(2)で述べる。

(4) 修道院の宗派

フリースラントのラウヴェルス川西部地域で初めに建てられた修道院は 1132 年のスタフォーレン司教座聖堂付ベネディクト派修道院である。

後に続いた多くの修道院がヨーロッパで主流の 4 会派、つまり改革ベネディクト派、アウグスティノ派（聖堂参事会修道院）、シトー派、プレモントレ派のものであった。

フリジア人が多く参加した第五回十字軍（1217−1221 年）の後、これらの 4 会派に加えて大きく 2 つの騎士修道会が修道院を建設した。聖ヨハネ騎士団[28]とチュートン騎士団である。これら騎士修道会の構成メンバーとしてフリースラントでは騎士修道士はおらず、すべて修道士と平信徒のみからなっていた。

13 世紀には新しい托鉢修道会、フランシスコ会とドミニコ会がそれぞれの修道院を建設した。主要なものは 1245 年創建レーワルデンのフランシスコ会修道院と 1280 頃創建ボルスワルドのドミニコ会修道院である。14 世紀前半にはヴードセンドとエイルストにカルメル会修道院が建てられた。托鉢修道会の修道士たちは毎年、地域中心から周縁部へと、説教をしながら托鉢に出かけた。

その他、ベギン会[29]など、厳密には修道院とは異なるが半俗半聖の女性が共同生活を行う場所（Begijnenhofje という）もフリースラントの中にみられ、我々が調査した都市ではボルスワルドにあった。4.2.3(3)の社会保障に関する記述を参照されたい。

(5) 修道院を構成する人々と組織

修道士または修道女になるには、dos という一種の持参金、通常土地を寄進することが必要であったので、正式に修道士あるいは修道女になれるのは富裕な人々に限られ

の権利。対象となるのは教皇、枢機卿、大司教、司教座聖堂の高位聖職者、修道院とその学校に付属するものを除くすべての教会であり、すべてのカトリック教徒（17 世紀後半にはプロテスタントの王侯にも認められた）に patronage の主体となる資格がある。保護者は寄進した土地を良い状態に保つ義務がある。

[27] Middelzee は Westergo と Oostergo の間を分けていた Boorne 川の河口の湾。Middelzee という呼称は 1500 年頃から使われている。それ以前には Boorne, Bordine, Bordena と呼ばれていた。1000 年頃には、ボルスワルド付近で西側の支流マルヌ海とつながっており、Westergo 北部は完全に海に囲まれた状態だった。11 世紀、Oostergo のボルスワルド東部からダイクが築かれてマルヌ海・ミッデル海の干拓が始まり、ミッデル海は南から北に向かって埋め立てられた。17 世紀までにミッデル海はほぼ埋め立て完了し、干拓による新しい土地は Oostergo、Westergo とは別の行政区分で Het Bildt と呼ばれるようになった。

[28] ホスピタル騎士団とも。修道騎士団。修道騎士は修道士かつ戦士として十字軍に従軍し、聖地巡礼者の守護と聖地防衛・奪回の先鋒として大きな役割を果した。聖地エルサレムの聖ヨハネ修道院跡に病院兼巡礼者用宿泊所として 1023 年頃創設され、1099 年の第一次十字軍以来独自の憲章のもとに騎士団として確立された。エルサレムがイスラム勢力の手に落ちて以降、キプロス、ロードス島、マルタ島、シチリアなどに退いて聖地奪回に参加。1312 年テンプル騎士団の資産と領地が没収されたときに多くを引き継ぎ存続し、イスラム世界との地中海における軍事的対立で一定の役割を演じる。16 世紀宗教改革時に騎士団領は没収され存在意義も薄れていき、スペインやロシア海軍に組み入れられる。ローマに本部を置いて現在まで存続。

[29] Begijn とは、ネーデルラントとライン川流域の都市に 12、13 世紀以降に現われた半俗半聖の女性をさす。礼拝堂と施療院を中心に壁で囲まれた Begijnenhofje という区域をつくり、独自の共同生活を行った。
Begijnenhofje と Hofje の違いは、前者がカトリックの女性たちの自治的な組織であったのに対し、後者はもっと慈善的な組織であったことである。Hofje に入居する条件は四つほど（①だいたいの場合において女性であること：ほとんどが女性によって設立されており、運営面の理由から②信仰を同じくすること：Hofje によっては教会組織が設立した③50 歳以上：17 世紀から最低年齢が設定された④貧困層であること：慈善的性格をもつことから）あった。18 世紀になると入居者が賃料を払う商業的な Hofje も出現した。

た。寄進する土地のない者は、平修士として修道院に迎え入れられ、修道院の土地・家作の労働者となった。平修士と修道士の数の比は、フリースラントで3対1程度であったと見積もられている。この平修士の労働者の存在が修道院の財政を富ませる主な要因となった。

Oostergo と Westergo の中心に建てられた修道院の中で古いものは1158年のミドルムのアウグスティノ派聖堂参事会修道院、1165年のリンスマヘースト近くのシトー派Klaarkamp修道院[30]、1163年のハルムのプレモントレ派Mariëngaarde修道院（図4.2.2.2参照）であり、これらフリースラントの母修道院から新しく子修道院が派生し、母修道院とともに共同体を形成するようになった。こうした母−子修道院の分離システムはfiliation[31]というが、教区教会の分離独立についても同様のシステムがみられる。詳しくは4.2.4(1)に述べる。

12、13世紀創建のフリースラントのほぼすべての修道院が男女両方を受け入れ、修道士も修道女も最初は同じ修道院にいた。修道院が豊かになると女性は女性だけで別の修道院を形成した。シトー派とプレモントレ派は男女を空間的に分けるだけでなく階層差を設けた。Mariëngaarde修道院では、女子修道会はBethlehem（後にBartleheim）と呼ばれるようになった。男子修道院に従属する女子修道院は15世紀まで派生し続けた。このシステムをとるメリットは、男子修道院の平修士の男性を女子修道院でも労働力として利用することができるということであった。女子小修道院の院長は修道女たちの中からリーダーとして選出されるとともに大修道院長に従属し修道院のヒエラルキーの中に位置付けられていた。

(6) 修道院改革と世俗権力の役割の拡大−15世紀−

15世紀、フリースラントにおける修道院の社会的役割は縮小、変化した。その原因はDevotio Moderna運動[32]などによって修道院の領主としての性格が見直されたことである。Windesheim修道院[33]とThabor修道院[34]（図4.2.2.2参照）がフリースラントの中心的な改革派修道院になった。

カトリック改革派は、平修士の集団を使役して農地を耕作し収益を上げ財産を蓄積することよりも、祈りと孤独な内省的生活を送ることを活動の中心とするようになった。そのため修道院が使役していた平修士の数が減り、彼らは小作人になっていった。

また、世俗的な財産や権力の範囲が縮小した修道院に代わり、世俗権力であるホーフデリンフ（hoofdeling）[35]や都市執政者層が土地保有者として台頭してきた。

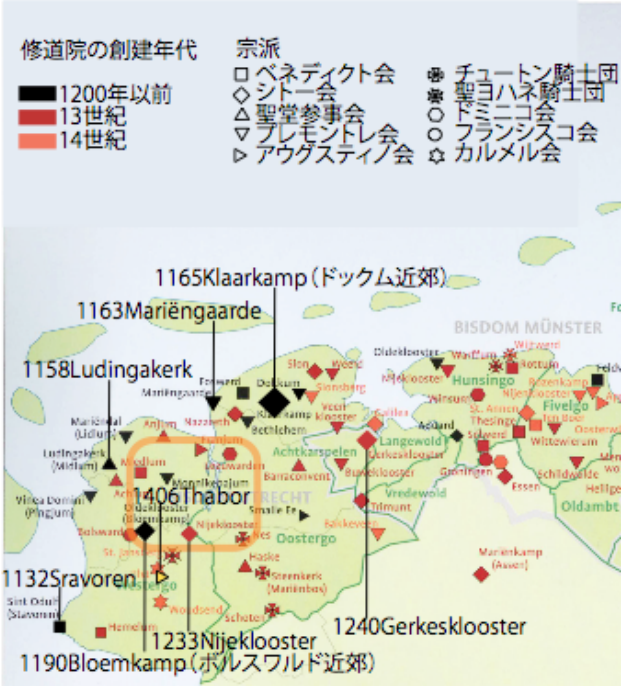


図4.2.2.2　主要なフリースラントの修道院の位置と創建年代
（*De Bosatlas van Fryslan*より）

(7) 宗教改革と修道院の破壊・消滅−16世紀−

カトリック教会内の改革の後の16世紀、フリースラントの修道院は宗教改革[36]というさらに困難な時期を迎える。人文主義者とプロテスタントは死後の救済を疑い、人々のカトリック教会に対する支持は失われていった。

修道院に入る人は減り、修道院にもたらされる寄進が減った。特に男子修道院に入る者の数は激減した。13世紀に100人以上の修道士がいた修道院の中には1500年頃にはおよそ10人しか修道士がいないというところもあり、残っている修道士はたいていフリースラント出身者ではなかった。農村部に大土地を所有する修道院は富裕だったので、「役立たずの他国者」を養っているという批判も増大していた。

1570年頃始まった反宗教改革は、フリースラントの修道院を存続させるのには間に合わなかった。1580年代初頭に

[30]フランスClairvaux修道院とドイツのRiddagshausen修道院によって1165年頃ドックム西部のリンスマヘーストに建設された、オランダ北部最初のシトー派修道院。ドックム一帯に広大な領地をもち、指導的地位にあった。修道士は白衣を着用し、平修士は灰色の衣を着用したので、フリース語で別名skiere mûntsen（灰色の僧の意）と呼ばれた。ボルスワルド近郊のBloemkamp修道院（1190年）、アドアルドのAduard修道院（1192年）、イェルザレムのGerkesklooster修道院（1249年）はKlaarkamp修道院の子修道院。ワッデン海の島Schiermonnikoog、施療院、フェーンヴーデンのスティンズ（註35参照）を所有・運営した。

修道士、平修士たちが従事した仕事で特筆すべきものは、修道院近くで採れる粘土を用いたレンガ製造、Klaarkampermeer（Klaarkamp修道院の湖）の造成、泥炭採掘である。

宗教改革により、1580年に修道院は解体され財産はフリースラント州に没収された。建物自体も解体され、基礎や石材は売られた。20世紀に基礎部分の発掘調査が実施され、元々テルプの高さは4.5m程度であったこと、修道院以前にローマ時代にさかのぼるものであることが分かった。

[31]教会法において、ある規模に達した修道院や教区から、修道院または小教区が分離独立していくこと。中世において一般的で、シトー会則に定められた。filiationという言葉は元々親子関係の認知をさす。

[32] 14世紀キリスト教会に起こった改革運動。『キリストに倣いて』を著したトマス・ア・ケンピスらを中心に、世俗的財産を蓄積する修道院のあり方を見直し、祈りと内省的な瞑想の方法を模索した。

[33]ズヴォーレの近くに建設された元々アウグスティノ派修道院。14世紀末にこの修道院からオランダとドイツの修道院改革が始まり、より質素で個人の瞑想を重んじる会派が広まった。Windesheimは1572年から改革派（プロテスタント）勢力によって破壊されたが、Uden修道院はオランダで唯一宗教改革を生き延びて20世紀まで存続した

[34] Sneek近郊のTirnsに1406年に建てられたWindesheim修道院傘下のアウグスティノ派修道院（priory）。Thabor修道院の修道士たちはミッデル海干拓のための堤防建設に従事した。宗教改革により修道院の建物は1572年に破壊された。

[35] 中世フリースラントで指導的役割を担った首長たちのこと。12世紀から13世紀にかけて、「フリジア人の自由」と呼ばれる農地をもつ者が平等な権利をもち投票によって裁判権をもちまわる一種の自治が行われた。14世紀、平等性が薄れ台頭してきた有力家がhoogdelingenであるが、集権的領主が現れることはなかった。カロリング朝の王あるいは神聖ローマ皇帝からその権威を保障されたものではなく、低地地方の伯領の衰退によって力を得た。有力家は配下の兵をもち、石造りの防御施設を備えた館（スティンズ）に住んだ。

[36] 16世紀後半、フランスからカルヴィニズムがネーデルランドに入り、普及し始める。ネーデルランドの反乱＝オランダ独立戦争＝八十年戦争には、宗教戦争としての側面も大きい。1594年にネーデルランド北部7州によるユトレヒト同盟が完成し、南北分裂が起こった。ハプスブルク家支配下の南部がカトリシズム以外を許さない状況に対して、北部ではカルヴァン派下級貴族の組織を背景にオラニエ公ウィレムがカルヴィニズムを推進した。

はカルヴァン派による宗教改革は完了し、修道院の所有する大きな土地は州によって差し押さえられ、「敬虔な目的の場合にのみ」税を支払って使用することが定められた。没収された修道院の財産・聖職禄は、フラネケル大学[37]の財源や八十年戦争の戦費に利用された。

濠に囲まれた大修道院の多くは、スペイン側に拠点として利用されないように早い段階で破壊されてしまった。1600 年に残っていた建物は建築用の石を採る場所として利用された。19 世紀初頭には、基礎に至るまでほぼすべての痕跡が消えてしまい、かつての大修道院の勢力を思わせるものはほとんど残っていない。

4.2.3　修道院が地域形成に果した役割

(1) 大土地所有者としての修道院

中世フリースラントの修道院は周辺の地域社会にとって大きな存在であった。修道院が地域に対してもった重大な意味は、フリースラントにおける最初の大土地所有者であったということだ。土地所有の拡大は、地所の寄進と地所それ自体から上がる利益を通じてもたらされた。耕作は先述したように修道院が使役する平修士たちによって行われた。

豊かな修道院農場は同時代で最も大規模な農業経営の場であり、最も収穫高のある土地であった。ワッデン海のネス島に地所をもつドックム近郊の Klaarkamp 大修道院（註 30 参照）は単独で 200 ヘクタールもの広大な土地を所有し、1580 年には Westergo と Oostergo あわせて最も価値ある土地の 15%から 20%を所有していた。Klaarkamp 大修道院、その子修道院 Gerkesklooster 修道院と女子修道院はあわせて、価値にして 6.000 ポンド（およそ 2.500 ヘクタール、80 の農地）の地所を所有していた。

(2) 干拓事業とその維持を通じた土地獲得

4.2.2(3)で述べたように、干拓やダイクの維持は修道院が地域に対して果した重要な役割であった。11 世紀ー15 世紀のミッデル海干拓について少し詳述する。

最初のダイクは 11 世紀に作られ、少しずつ環状ダイクが築かれてマルヌ海とミッデル海が農地へとつくりかえられていった。11 世紀の段階では修道院組織はこの辺りでは確立しておらず、ダイク建設の主体はミッデル海沿いの有力な農家であったと考えられる。古いダイクは新しいダイクの基礎となり、干拓は分節的に行われた。ミッデル海をせきとめたダイクの外側に並行してローカルなダイクが築かれた。さらに、ミッデル海ダイクに直交するダイクも築かれ、もとの排水路を不要のものにしていった。新しい並行・直交ダイクが築かれると古いダイクはその機能を失い、インダイクと呼ばれて氾濫に対する二番目の防衛線となった。

11 世紀の間にミッデル海はヴァークサンスの方に向かって囲い込まれ、12 世紀初めにはフロートヴィルムとスハルネホトムの間に第二のバリア、ネイランズダイク（新しい土地のダイクの意）の建設が始まった。1190 年に建設された Bloemkamp 修道院[38]は干拓地に建設された。1240 年頃にはクリンセラルムダイクによってミッデル海の南西の小湾部分が埋め立てられた。このダイクは Bloemkamp 修道院が建設したものであることが分かっている。13 世紀には干拓のスピードが上がった。35 年ほどでボクスマーダイクが築かれ、2500 ヘクタールの新たな土地ができた。1300 年頃にはミッデル海干拓のための最後のダイク、スケーレダイクが建設された。

新しく獲得された広大な土地は主に牧畜に用いられ、居住密度はそれほど高くなく、農家の多くは一番古いダイク沿いに分布した。ミッデル海沿岸に位置した Thabor 修道院（註 34、図 4.2.2.2 参照）や Nijklooster[39]修道院（図 B）が干拓事業を行ったことがわかっている。当初修道院が獲得した土地は少なかったが、ダイクが決壊し洪水が起こるたびに修道院の地所が増加した。干拓地の他の所有者が自力で決壊部分を修理できない場合、修道院がその土地を手に入れ修理したためである。

11 世紀にミッデル海干拓が始まったときには分節的に行われたダイク建設であったが、13 世紀頃にはより広大な干拓地を獲得するため一つながりのインフラとして統合的に管理する必要が生じていた。組織の規模、財力、技術水準等の点において、修道院は治水・干拓事業の統合的管理を行うに最適任者であったといえよう。

(3) 修道院による裁判・教育・社会保障

フリースラントの修道院では修道士は同時に司牧にも関わった。ベネディクト会、アウグスティノ派聖堂参事会、聖ヨハネ騎士団、チュートン騎士団は多くの教区教会の司祭叙任権をもっていた。13、14 世紀のフリースラントの教区のおよそ 4 分の 1 は修道士によって司牧が行われていた。たとえば、リドルム聖堂参事会修道院では Westergo 北部の 8 の教区に司祭を派遣していた。修道院は司祭の教育という機能があった。各教区の司祭たちは、裁判など政治的な場で調停や諮問を行い、大修道院長、小修道院長などの高位聖職者たちに劣らぬ重要な役割をもっていた。

教区は村落を管理する性格をもち、教会は地主でもあった。各地の教会は司祭の訓練と教会に関する諸事に影響力をもったが、司祭の叙階に関しては司教の管轄であった。司祭は、ミサで祝福を与え秘跡を施すのみならず、助祭の協力を借りて教区民を教育する役目ももっていた。

寡婦、孤児、病人など社会的弱者の生活保障は修道院が担っていた。修道院解体後こうした社会保障の側面は都市執政者層が担っていくことになり、Hofje という建築類型を通じて修道院のシステムや空間構成が都市に残存していると考えられる。我々が調査した都市では Hpofje はフラネケルに存在し現在も使用されている。本稿では詳述しないが、これは救貧院の性格をもち、経済的に恵まれない独身女性あるいは寡婦の集合住宅である。門と塀あるいは生け垣で囲まれた空間で、中庭を囲むように個室がつながって建てられている。この空間構成は 4.2.2(4)でふれた Begijnenhofje に倣っているといわれ、今後ボルスワルドにあった Begijnenhofje との比較などを通じて、宗教改革を経ても都市内に継承されている修道院の社会保障システムを検討できる可能性があると考えている。

4.2.4　教区教会が地域形成に果した役割

(1)　母教会と子教会

[37] 1585 年創設、ライデン大学に次いでオランダで二番目に古い大学。神学、法学、医学、哲学、数学、物理学で有名で、17 世紀にはヨーロッパ全土から学生を集め、デカルトら啓蒙思想の先駆的知識人・思想家を輩出した。フラネケルは八十年戦争において早々にオラニエ公ウィレムにつき、プロテスタント知識人の避難所としての性格ももっていた。

[38]別名 Oldeklooster とも。ボルスワルド近郊ハルトヴェルドに、Klaarkamp 修道院（註 30 参照）によって 1190 年に建設されたシトー派男子修道院。1424 年に修道院改革を経て、1572 年から改革派反政府勢力による破壊を受ける。有力な修道院として、修道院自体一個の独立した教区とみなされることもあった。

[39]別名 Aula Dei. スネーク北部、スハルネホトムに 1233 年に建てられた Bloemkamp 修道院（註 38 参照）傘下のシトー派女子修道院。1436 年修道院改革、1572 年から改革派反政府勢力による破壊を受ける。

教会の filiation（母子関係）について、すなわち母教会[40]–子教会–孫教会というある教区の教会ネットワークについて説明する。子教会の分離プロセスは創建文書によって詳しく分かることもあるが、創建文書が今は失われている場合も多い。宗教改革において教会の創建文書や修道院文書の多くが焼かれたためである。しかしながら、以下にあげるおよそ4つのソースを用いて filiation を再現することは可能である。

① 十分の一税の記録。子教会は年ごとに母教会に十分の一税を納めていたので、十分の一税の記録が残っていれば filitation の関係が分かることがある。

② seend[41]の記録。一種の宗教裁判である seend は母教会において開かれた。

③ 教会堂が奉献されている聖人の名前。教会に冠せられた守護聖人の名前は時代によって傾向、流行が異なるため。

④教区境界の引かれ方。境界線そのものの引かれ方が子教会の分離プロセスを知る大きな手がかりになることもある。

ここまで述べた教区教会の特徴や形成プロセスは西ヨーロッパの他地域と類似しているが、他地域にみられない中世後期フリースラント特有の二つの現象がある。

それは、12 世紀から 13 世紀にかけて教区教会の数が大変増加したことと、教会に対して教区民が及ぼした影響力がしだいに大きくなったことである。まず前者の主な原因は、ミッデル海干拓によって教区に編入すべき新しい土地が次々つくりだされたことであるといえる。後者の主な原因は、14 世紀におこった教会・修道院改革である。12 世紀から有力な修道院を築いたドイツやフランス起源の大修道院や教会と、司教が 14 世紀になって対立し、司教は彼らから権利を剥奪した。かわりにフリースラントから新たな修道院が興り古い修道院が改革されたが、大修道院の勢力が縮小するとフリースラント内戦[42]期に台頭しつつあったホーフデリンフ（註 35 参照）や都市執政者層が影響力を拡大した。次節では具体的な教区を例に説明する。

(2) ヨルヴェルド教区の分割とミッデル海干拓

ヨルヴェルド教区はフリースラント特有の状況がどのように形成されたのか説明するよい例である。場所は 4.2.2(2)で述べた、11 世紀から 17 世紀に干拓されたミッデル海の西岸にあたる。

ヨルヴェルドは教会堂が聖バルデリック[43]に奉献されているために創建は彼の死の 917 年以降であろうと思われがちであるが（前項参照）、10 世紀以前にすでに創建されており、フリースラントの司教制教会の第二世代にあたる。第一世代は 8 世紀のフラネケルの聖マルティニ教会と 9 世紀のボルスワルドの聖マルティニ教会である。元々ユトレヒト大司教区に所属し、1200 年頃はここから上がる歳入がハルトヴェルド近郊のシトー派 Bloemkamp 大修道院に入るようになっていたが、Bloemkamp 大修道院は後にこの収入を放棄することになる。

ヨルヴェルドはすぐ隣り合う村落の教会群の母教会であった。母教区の範囲はヨルヴェルドに保管されていた seend（註 41 参照）の記録にもとづいて構成することができる。ヨルヴェルド小教区そのものの記録はないが、隣接するボクスム、リオンス、ヒラール、イェルム、ベールス、ヴァイドゥム、マントゥム、スキラール、オーステルヴァイルム、ボズムの小教区の記録が残っていることから、これらの小教区がヨルヴェルド教区の領域を構成していたと考えられる。ヨルヴェルド教区は東はミッデル海の低地、西は沼がちな草地に限られた一つながりの領域である。教区間の境界線をみると、この解釈に合致する（図 4.2.4.1 参照）。

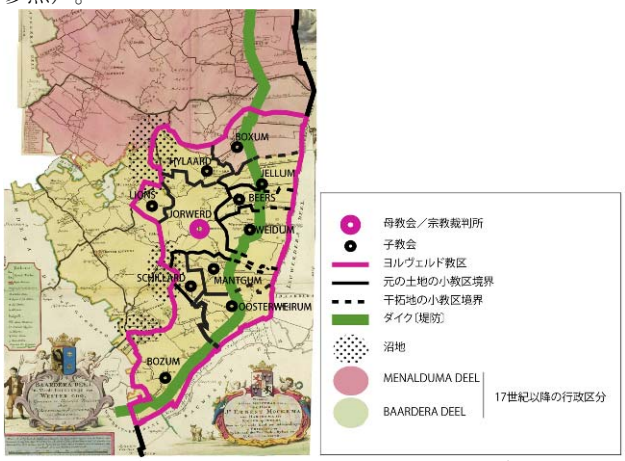


図 4.2.4.1　ヨルヴェルド教区から分離独立した小教区の範囲とミッデル海干拓地
（Hans MOL & Paul NOOMEN,《De Ontwikkeling van de Parochiekerken》, François HALMA, 'Grietenij-kaarten', 1718. より作成）

子教会の分離は母教会の司祭と教区民にとっては財産の喪失を意味したので、できるだけ母教会から損失を出さぬように注意が払われた。ヨルヴェルドは常に最も大きい小教区であり、最初の子教会ボズムがそれに続く規模の小教区であった。

ボズム教会はユトレヒトの聖マルティヌスに奉献され、この聖人を守護聖人とした最初の教会となった。聖マルティヌスは後にはかなり一般的な守護聖人となった。次いで主流になった守護聖人は聖カタリナと聖ニコラスで、リオンス教会は聖カタリナに奉献され、オーステルヴァイルム教会は聖ニコラスに奉献された。つまり、リオンスとオーステルヴァイルムはボズムよりも教会の創建年代が新しいということが、奉献された守護聖人の名前から分かるのである。フリースラントでは一般的に Nij あるいは Nieuw（新しいの意）という接頭辞がつく名前の集落の教会は聖カタリナか聖ニコラスに奉献されている。

[40]小さな教会が独立した際にその元になった教会のことを moederkerk（母教会）、独立したほうの教会を dochterkerk（娘教会）と呼ぶ（註 31 参照）。

[41] synod（教会会議）に由来する言葉で、中世オランダにおいて教会法廷（宗教裁判）を意味した言葉。姦通、異端審問などが扱われた。

[42] 14 世紀半ばからほぼ一世紀続いたフリースラントの内戦。その結果「フリースラントの自由」が終焉をむかえた。Schieringers：シトー派修道院閥と Vetkopers:プレモントレ派修道院閥という二党派にわかれて戦った。経済の停滞から修道院とその統率する共同体が衰退し、ホーフデリンフ（註 35 参照）（hoofdeling）が裁判権をもち土地の者たちとの封建的関係を結んだ。彼らはカロリング朝の王あるいは神聖ローマ皇帝からその権威を保障されたものではなく、低地地方の伯領の衰退によって力を得た。その新興勢力の二派閥 Schieringers と Vetkopers が争った。きっかけはシトー派とプレモントレ派の平修士間の争いだったとされる。Vetkopers はフローニンヘンを勢力下におさめ、一方 Schieringers は Westergo を掌握して外国に助けを求めた。1498 年、Schieringers は全州総督（stadhouder general）ザクセン公アルブレヒトに救援を要請し、アルブレヒトはこれに応じてフリースラント全土を制圧した。1499 年、皇帝マクシミリアンはアルブレヒトをフリースラントの世襲の統治者、総督に指名した。ほどなくアルブレヒトとその傭兵部隊に対しフリースラントは反感をもち、フリジア人たちはヘルダーラント公の援助により政治的独立を奪回しようとしたが成功しなかった。この時期をもってフリースラントの政治的独立は失われ、19 世紀に回復されるまでフリジア語は公用語でなくなった。

[43]ユトレヒト司教 Balderik（918-976）はヴァイキング襲来の後フリースラントの教会組織を整え、聖人崇拝のシステムを整えた。9 世紀末にユトレヒト司教を務め、917 年に Ootmarsum で没し、死後すぐに列聖された。

1000 年から 1300 年の間に、直接間接にヨルヴェルドから 10 の子教会が分離した。リオンスやスキラールの小さい小教区でも 6 つや 7 つもの農地財産を与えられた。1100 年から 1250 年の時期は、特に教会建設と子教会分離の動きが活発な時期であった。その結果、1500 年頃にはフリースラントに 350 の小教区を数えるまでになっていた。これはユトレヒト大司教区に属する 1600 の小教区のほぼ 4 分の 1 にあたる数であった。この増加の期間はミッデル海干拓による新しい土地の獲得の時期と一致する。

14 世紀後半には、古い母教区から子教区が分離独立する時代が終わった。ヨルヴェルド教区にもあてはまることであるが、この頃教区民の中に土地に根付いた有力者として台頭してきたホーフデリンフと呼ばれる人々があり、彼らが教会建設で重要な役割を果した。新しい教会を建設するには、敬神の心と資金に加えて、地域における世俗権力が決定的な要因となった。

ヨルヴェルドの子教会イェルムでは、教会の立地と地所の範囲を決定するにあたりホーフデリンフ（註 35 参照）の Mammema 家が指導的役割をもった。ヴァイドゥムの Ludijgakerke 修道院の建設にあたってはホーフデリンフの Hania 家と Dekema 家が同じような役割を果した。Oosternijkerk では Marienhgaarde 大修道院とホーフデリンフなど有力者の間の協力があった。多くのフリースラントの村落で、教会と有力者家長の間に、有力者が教会建設に参加するという長年の封建的取り決めがあった(註 26 参照)。フリースラントの教会の多くは、このように教区民の力によって誕生した。

4.2.5　教会を中心とする集落の基本構成-ベールスを例に-

(1)　放射状分割テルプ集落の構成要素

ベールス小教区はヨルヴェルドの北東方向に位置し、ヨルヴェルド教区から分離した小教区である。ミッデル海のダイクをこえて新しい土地をその範囲に含んでいる（図 4.2.4.1)。

集落はヨルヴェルドにつながる自然水路沿いに位置するテルプの上にある。この集落の特徴的な要素を以下に簡潔に示す。

13 世紀、テルプ上にベールス小教区教会が建てられたが、これは今では現存しない。テルプの西側には Uniastate という盛り土をして濠を巡らせたスティンズの跡が残っている（図 4.2.5.1)。16 世紀初めまでは、テルプのすぐ南側に別のスティンズが建っていたが、取り壊して Uniastate が建設された。地方有力者 Unia 家が所有したので Uniastate と呼ばれるようになった。現在は 1690 年頃の門のみが残る。1993 年から 94 年にかけて実施されたフリスク・アカデミーとフローニンヘン大学の考古学チームの発掘調査で、Uniastate の北側の壁基礎の年代は 14 世紀で、おそらくこの付近の修道院で焼かれた重いレンガが用いられていることが分かった。

この地域にはベールスに似た構成の集落が多くみられ、テルプから周囲の粘土質土壌の牧草地に向かって放射状に道と水路が走っている。ヨルヴェルド周辺の集落でベールスと同じ構造をもつものとしてマントゥム、ボクスム、リオンスなど（図 4.2.5.3）がある。

図 4.2.5.2　上からベールスのスティンズ,1832 年の地籍台帳、現在の航空写真。

テルプを放射状に分割する集落の構成要素は以下のようなものがあげられる。

・テルプの外側にへばりつくように、あるいは一重の水路の外側に住宅が位置する。

・テルプまたは自然の微高地の最も高い部分に教会が建設されている。

・修道院が教会に付属、あるいは集落の周縁に位置することもある。

・有力者の居館であるスティンズが周縁部に一つまたは複数ある。スティンズはそれ自体周囲に濠をもっている。

・ テルプの外縁に沿ってリング状道路と排水、舟運の機能をもつ水路が巡っている。

・ テルプから周辺に向かって放射状に道と水路が走り、放射状の敷地割になっていることが多い。

・ 集落の外側の農地もしばしば放射状の敷地割になっている。

上記の構成要素のうち、テルプ中央に置かれる教会は、古くともフリースラントで教会建設が活発化した 12 世紀以降のものであると考えてよい。人の居住はそれより大幅に昔、紀元前 6 世紀頃からあった。テルプの地中から発掘される遺物が根拠である。

(2)　ドックム周辺でみられる放射状分割テルプ

ドックム北部一帯にも類似のテルプ集落が分布しており、我々が調査したところでアールスム、ヘーヘベイントゥム[44]（図 4.2.5.4）がある。これらの放射状に分割されたテルプは、ヨルヴェルド周辺でみられるものとは若干異なるようである。ドックム周辺では、中心に置かれた教会

[44] Hogebeintum. ドックム北西にあるテルプ集落。フリースラントにテルプはおよそ 1000 個存在するが、その中で最も盛り土が高く 8.8m ほどである。

部分とそこに至る道は高く盛り土されているが、濠と道に囲まれた円形部分はむしろくぼんでいる。

このような類似性と差異がどのような理由によって生まれてくるのか考察することが今後の課題である。

- 平面方向とともにテルプの断面方向
- 地質の差
- テルプの土地を何に利用しているのか
- テルプ下の周辺農地を何に利用しているのか
- 両者の関係

といった情報が必要であろうと考えられる。

図 4.2.5.3　上からマントゥム、ボクスム、リオンスの現在の航空写真。いずれもヨルヴェルド教区から独立した小教区の集落で、小教区教会が置かれたテルプから放射状の地割がみられる。

図 4.2.5.4　上からアールスム、ヘーヘベイントゥム。ドックム北部で放射状分割テルプであることがみとめられる例。

4.2.6　今後の展望・論点

本稿で扱ったことから以下のような今後の調査のポイントが浮かぶ。

- 修道院が建設したダイク・水路とその建設年代を明らかにする
- Begijnenhofje と hofje など、宗教改革による完全な破壊を受けなかったと考えられる修道院関連の都市内施設について調査する
- 放射状分割のテルプ集落について複数調査を行い、その形成と都市内テルプの形成について比較考察を行う

今後考古学や中世史の知見と調査結果をあわせ、これらのポイントについて調査・分析を行うことを通じて、広域における土地造成、インフラ整備、都市とそのまわりの農村部の関係について、空間構造を明らかにしていきたい。

4.3 都市インフラとしてのテルプードックムの都市形成史

4.3.1　都市調査成果の史料性と目的

2.4 で述べたように、都市調査として道・水・地形の実測調査を行った。［図.4.3.1.1］はその成果図面である。地形は居住地形成の基底であり、道や水路は都市を他の都市や集落へと接合させる役割を持つ。これら都市インフラは都市を包含するより領域的な環境構築をも担ってもいる。ここで都市や集落を「図」と考えれば、都市インフラは「地」として捉えることができ、これは自然的変化と人為的変化の複雑な組み合わせによって歴史的に形成されてきた。他方、都市内部にスケールを落としても同様に考えることができる。類型的に把握できる建築や宅地、街区を都市の「図」とみれば、微地形や道、水路は都市の「地」である。これらは街区や土地をくくり出し、境界をつくりだす一方で、建築や場所を相互に結びつけてもいる。

ここでは従来「図」として対象化してきた建築や街区といったものから「地」である道や水、地形へと視線をずらし、それら都市インフラから都市の形成過程を遡及的に考察していきたい。そこでまず注目したいのは「テルプ’Terp’」とよばれる人工的な微高地である。フリースラントの都市や集落の多くはテルプを居住地の核として成長した。本分析で対象としているドックムも複数のテルプが結合することで発展した中世に起源をもつ古都である。［図.4.3.1.2］ように、現在みられる都市や集落は時代とともに人為的あるいは自然作用—災害・自然堆積など—によって段階的に造成されることで居住域を拡大し、形成されていく。つまり、わたしたちは、測量した地形や道が原初的な形態そのものではないことに注意しなければならない。しかし、あとで具体的にみていくように歴史的に積層を重ねてきたテルプにはかつての都市構造の様相を痕跡としてとどめているのである。

以下では、地籍図や絵図をベースとして道や地形といった調査成果を素材に分析を行う。まず既往文献からドックムの原初形態について概観し、調査成果からその痕跡を検証する（4.4.2）。つづいて、交易都市として発展する端緒にあたる中世前期の都市構造を既往の考古学調査成果に学びながら道や地形から仮説的に構築する（4.4.3）。そして、中-近世移行期の都市構造の変化から宗教改革以前の都市の分節構造を読み取る（4.4.4）。最後に、近世都市の都市構造の成立とその意味するものを考えたい（4.4.5）。

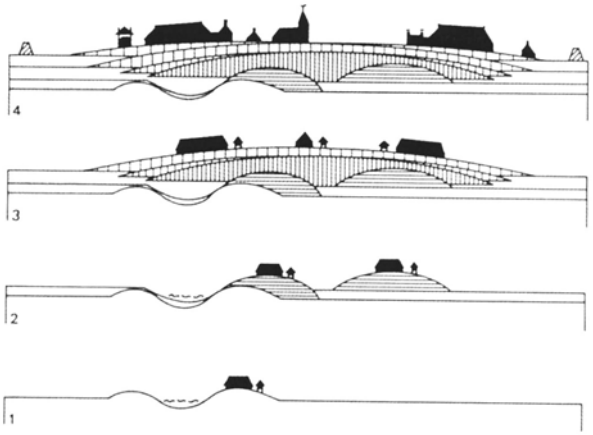


図 4.3.1.2　テルプの成長過程（出典："Nederland in Prehistorie"）

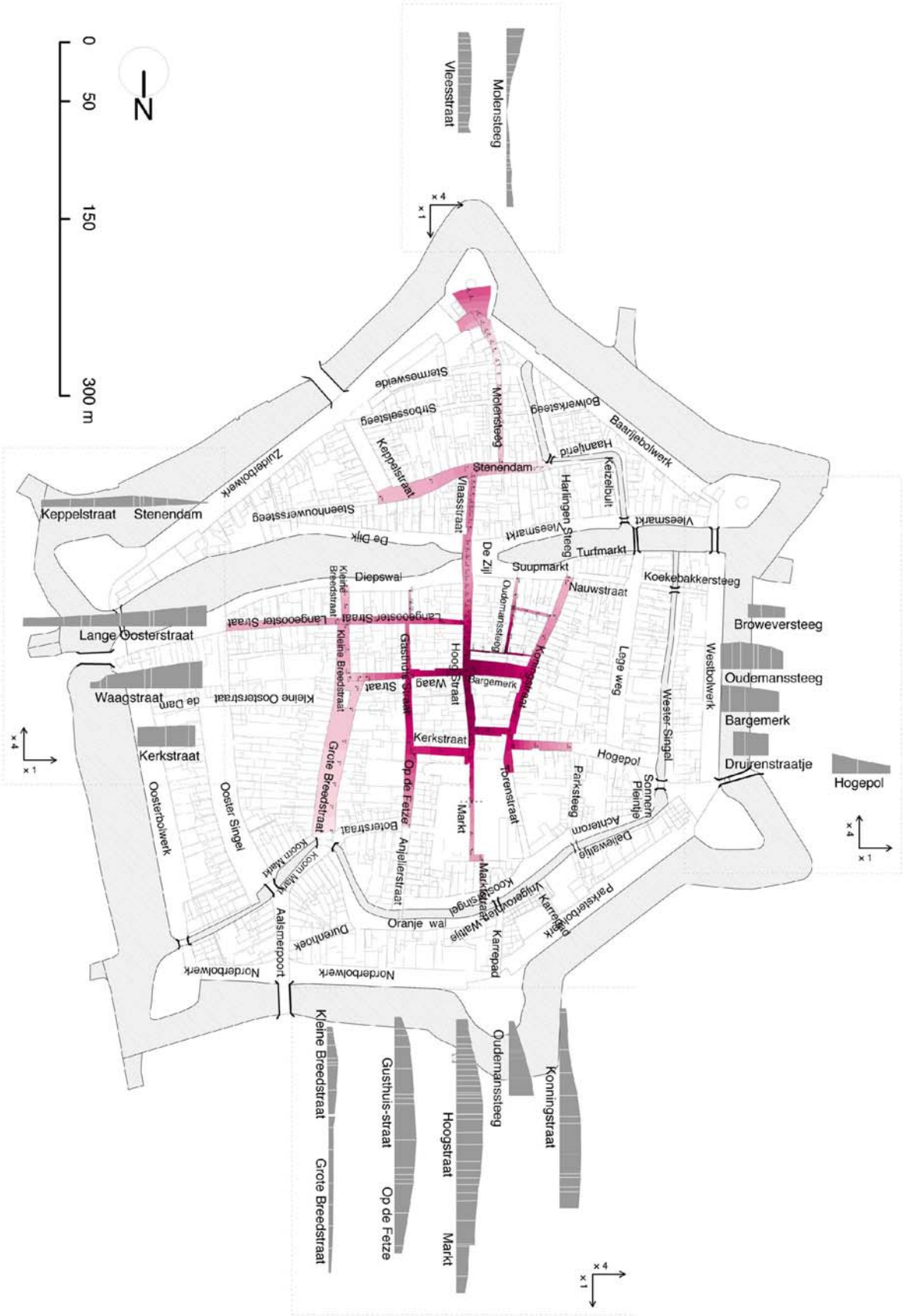


図 4.3.1.1　ドックム都市調査成果図面（地形と道の傾斜）

4.3.2　ドックムの原初形態—三つのテルプ：8-9c 頃

ドックムにはかつてテルプであったと考えられている場所が三ヶ所存在する［図 4.3.2.1］。それらは都市北部の現在のマルクト'Markt'に位置するマウント、マルクトとドックム中央を流れる自然河川エー川'Ee'（のちのドックマー・ディープ'Dokkumer Diep'）との間にあるマウント（ホーフストラート'Hoogstraat'あたり）、そして河口南側の小規模なマウントの三つである[45]。古代から中世前期にかけての記録は少ないが、既往の考古学的な知見をもとにドックムの原初的な居住空間についてみていく。

まず都市北部について。北側のふたつのテルプに関してはすでに考古学的な調査が行われており一定の知見が得られている[46]。調査によれば、少なくとも 9c ころには存在したという。しかし、ふたつのテルプのうちどちらが先行して造成されたかはわかっていない。マルクトに位置するテルプは 754 年の聖ボニファティウス殉教ののち造成された（ボニファティウス・テルプ 'Bonifatius Terp'）。その上には木造の記念教会が建設されたという[47]。以後、マルクトには教会や修道院、共同墓地などが建設され宗教的な場として確立されていくことになる。

図 4.3.2.1　ドックムにおける三つのテルプ

エー川のすぐ北にあるマウントの原初的な高さはマルクトのそれよりも 3m 以上高かったと考えられている[48]。現状の都市地形図や道の断面図［図 4.3.2.2］をみてみると、全体の形態や高さに変化はみられるものの、ふたつのテルプの高さ関係は現在まで変化していないことがわかる。エー川に直交するテルプの尾根道=ホーフストラート上に初期居住地があった[49]。

図 4.3.2.2　ホーフストラートの道断面にみられる二つのテルプの位置関係

つぎに都市南部である。南側のテルプについては考古学的な調査が実施されておらず、北側のふたつのテルプとの関係や形成年代など不明な点が多い。既往文献によれば[50]古代から中世までは河幅が広く、都市南部の土地をえぐるように流れていた［図 4.3.2.3］。現在のドックマー・ディープ北側と南側の道にはそれぞれ、デ・デイク'De Dijk'やディープス・ワル'Diepswal'と呼ばれており、どちらも「堤防」を意味している。それらから一本裏手の通りには、北側にランヘオーステル・ストラート'Langeoosterstraat'やナウストラート'Nauwstraat'、南側にステーネン・ダム'Stenendam'がはしっている。前者は直線的な形状を持っていること、後者は名前の意味からして、これらは初期的な堤防の痕跡と考えられる。またクレイネ・ブレードストラート'Kleine Breedstraat'の道の断面にはかつての堤防の形状がはっきりと現れている。［図 4.3.2.4］

図 4.3.2.3　中世ころのドックム（出典：:J.O.D. Kloosterman, drs. L. Prins,2007）

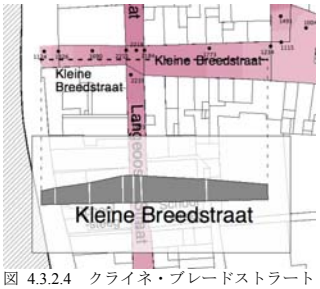


図 4.3.2.4　クライネ・ブレードストラートの道断面にみられる堤防の痕跡

［図 4.3.2.5］は 1832 年の地籍図上に中世ころのドックム中央を流れるエー川の姿を復元したものである。つまり都市南部のテルプは北部のそれにくらべて開発年代は遅い。また高さを比べてみても南部の方が著しく低く、地形的には川に沿って東側に偏向した楕円状である。このように南部のテルプはエー川の堤防としての側面が強く現れており、北部とは性格を異にしている。

最後に水環境について簡単にみていく。エー川は東にむかって外海（ラウウェル海'Lauwerzee'）へとつながり、西に向かって内陸部へとつづいていた。そして、エー川には

---

45 三つのテルプについては以下の文献などを参照。G. Blom ed. "11 FRIES LAND-FRYSLAN deel1, Dokkum, Harlingen, Hindeloopen, Stavoren en Workum", 2009, J.O.D. Kloosterman, drs. L. Prins, "*CULTUUR - HISTORISCHE VERKENNING BINNENSTAD DOKKUM*", rijksdienst voor archeologie, cultuurlandschap en monumenten, 2007,

46 都市内における既往の考古学調査としては、①Konningstraat の調査（DIJKSTRA ed., "*Archeologisch onderzoek aan de Koningstraat te Dokkum*", ADC, 2003）、② 北側教会近くの広場'Bargemerk'の調査（E. Schrijer, "*Dokkum Bargemerk Een Archeologische begeleiding*", ADC Rapport 435, ADC ArcheoProjecten, Amersfoort, september 2005）、③ 教会前広場'Markt'の調査（drs. Richard Exaltus, "*Dokkum (Fr.), Markt, Een Inventariserend Archeologisch Veldonderzoek*", Een onderzoek in opdracht van de gemeente Dongeradeel, november 2005）などがある。

上記は、現在わたしたちが入手した報告書に限っており、他にはマルクトにおける中-近世期の教会・修道院・墓地遺構の調査などの報告書があると思われる。

47 考古学調査では木造教会の遺構は発見されていない。教会建設にかんしては文書史料あるいは由緒によるものと思われる。*Ibid.* G. Blom ed,2009 など参照。

48 *Ibid*,G. Blom ed.,2009. マルクトにあるテルプの原初的な高さはおおよそ 3m(N.A.P.)であったという。

49 ドックムの原初形態はレーワルデン'Leeuwarden'（ホーフストラート Hoogstraat 沿い）のそれと類似性が高い。

50 *Ibid*, J.O.D. Kloosterman, drs. L. Prins, 2007 , p.7

北側から小規模な数本の自然河川が［前掲図 4.3.2.3］のようにドックムの初期居住地の周辺を通り、流れ込んでいた。

ドックムの原初形態はエー川北部に南北に並ぶふたつのテルプがあり、それぞれに宗教的な場と居住地が存立していた。そして、それらは河川に直交する尾根道＝ホーフストラートによって結ばれるという構造を備えていた。

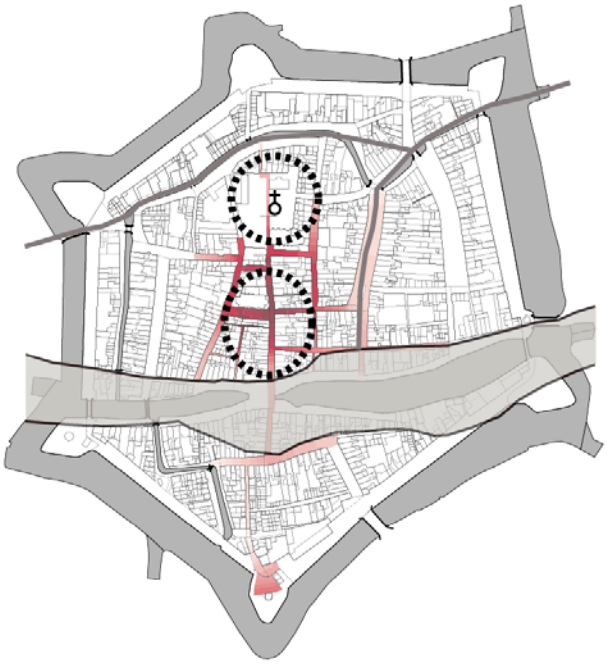


図 4.3.2.5　中世初期のエー川の復元

4.3.3　都市の軸と核としての修道院：10-13c ころ

さきにみたように、ドックムの初期居住地は北側の宗教的な場とそれに接続しエー川へとのびるホーフストラートを軸とする家並みから発展した。それではそれらの家並みはどのようなものであったのだろうか。そしてその後、ホーフストラートの東西の地区の開発はどのように進んだのであろうか。ここではまず、ホーフストラート西側にあるコーニングストラート'Koningstraat'およびバージメルク'Bargemerk'付近の考古学調査から中世後期の居住核であったホーフストラート沿いの宅地状況と都市西部の形成について概観し[51]、おもに微地形の考察から 10-13 世紀ころの都市東部の形成過程を仮説的に検証し、当該期の都市構造を推定する。

［図 4.4.3.1］はバージメルクにおける発掘調査の図面である。この地点はホーフストラート西側の家並みのちょうど後方にあたる場所［図 4.3.3.2］で、中世後期（13c）ころの遺構である井戸や水槽、多数の木製の杭などが発見された。これら遺構によって、当時この地点がホーフストラートの住宅の裏庭として利用されていたことが明らかにされた。また、コーニングストラートの考古学調査によれば、西側の地盤はいくつかの段階をへて造成されたもので、コーニングストラートが現在の道として成立したのは少なくとも 1450 年ころであるという。そして、それは 12c 後期から 13c と 14c から 15c の二段階にわかれるという。またコーニングストラート西側の地盤断面図［図 4.3.3.3］からは 14c ころの居住地のへりが読み取れる。すなわち、都市西部は 13c ころまではコーニングストラート付近を都市の境としており、ホーフストラート西側の住宅は後背部に裏庭を持っていた。そして、少なくとも中世後期ころまでは宅地の裏庭部分として利用されており、14-15c ころ（4.3.4）に、宅地化されることで道が形成されていったのである。これはのちにみる有力者ホーフデリンフ（hoofdeling）の都市への流入とスティンズ（Stins）の建設に関連すると推定され、コーニングストラートが地形等高線に直交するように湾曲しているのはこの時の宅地化に起因するものであろう。

一方、都市東部については考古学的な調査が行われておらず、既往研究では西側と類似した形成過程をもっているとの指摘にとどまっている。ホーフストラートを軸として都市東西の地区をみてみると、どちらにも南北にのびる街

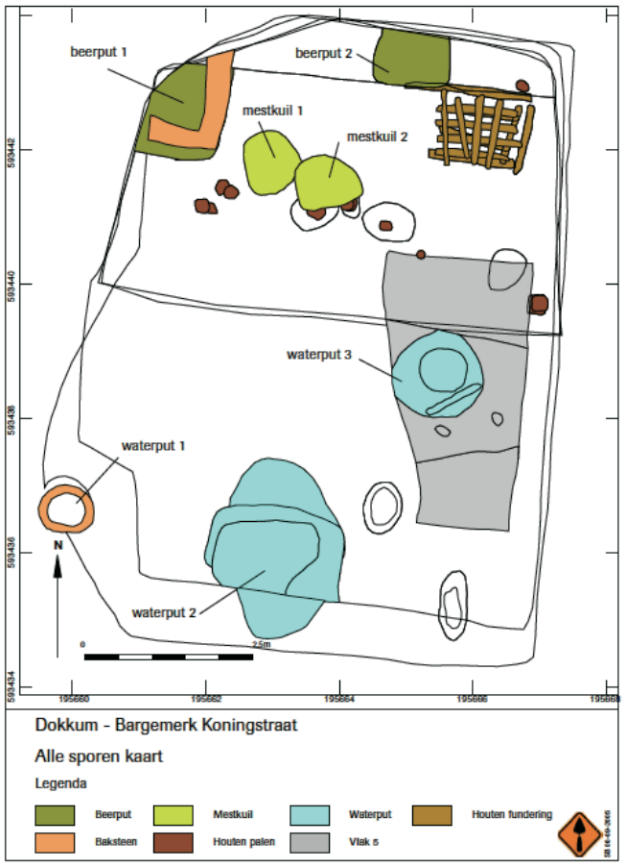


図 4.3.3.1　バージメルクにおける発掘調査図（出典：脚注 43 の②）

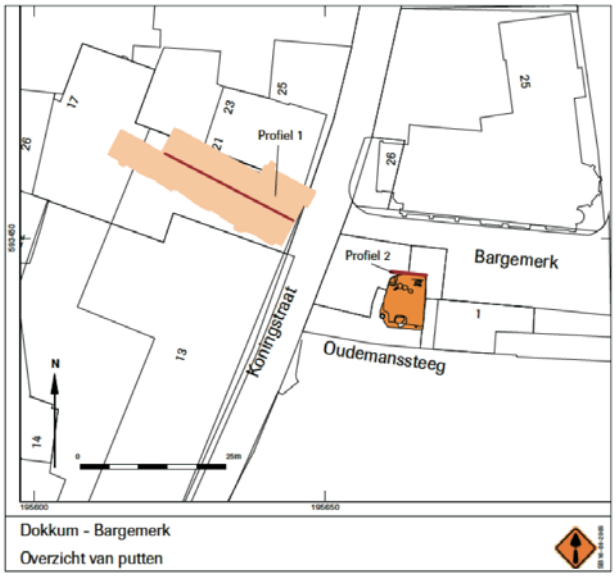


図 4.3.3.2　ドックムの考古学調査の対象地（出典：脚注 43 の②）

[51] Koningstraat の考古学調査成果については、Bargemerk 周辺の考古学調査報告書(*Ibid.* E. Schrijer, 2005)概要を参照。

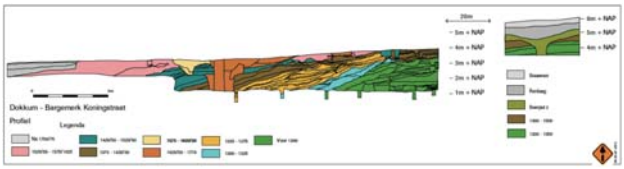


図 4.3.3.3　コーニングストラート西側の地盤断面図（出典：脚注 43 の②）

区がみられる。そこにはそれぞれフロート・ブレードストラート'Grote Breedstraat'とレーゲ・ウェグ'Lege weg'という類似する幅員の広い道が走っている。しかし、それらの道とホーフストラートとのあいだの街区は明らかに東西で異なる特徴をもっている。都市西部にはホーフストラート西側に不整形な街区や路地などが存在するのに対し、東側には東西／南北の道によって小規模な正方形にちかいグリッド状の街区がみられる。これらは東西の形成過程や時期の違いを明らかに示している。結論からさきに言えば、都市東部の開発は西部のそれよりも早かったと考えたい。以下、ホーフストラート西側と東側との比較から検証する。

さきにみたように、コーニングストラートは長期的かつ段階的な土地の分節の過程で生成された。そして湾曲した道が形成する西側の台形状街区は、その時間差をともなう不連続な造成に起因するものと思われる。街区内部にみられる T 字型の路地（オウデマンス・ステーフ'Oudemans-steeg'）などは、かつての裏庭を通る小道の痕跡ではないだろうか。他方、東側にはガストハイス・ストラート'Gasthuis straat'が南北に直線的に通っている。4.3.2 でみたようにランヘオーステルストラート＝堤防がエー川のへりであるならば、かつてガストハイス・ストラートは河川から直交する道であったということになる。これは西側とは対照的に、ある時期にガストフイス・ストラートが通されたことを示唆している。

以上の考察から、少なくともガストハイス・ストラートはコーニングストラートよりも早い時期に成立したと想定できる。また、堤防の建設はテルプの造成年代よりも新しく、東側よりも西側のほうが建設年代が新しいこと[52]はこの仮説を支持するものといえる。つまり当該期において都市東部にホーフストラートとガストフイス・ストラートという二軸が成立していた。

ところで、都市西部の境界はコーニングストラート付近であったが、東側の境界はどこであろうか。さきにみたフロート・ブレードストラートの地形レベルをみると中央テルプよりも著しく低くなっている。また［図 4.3.3.4］からフロート・ブレードストラート西側街区の曲線は地形等高線とほぼ一致していることがわかる。つまり都市東部の境界はフロート・ブレードストラート付近であったと想定される。さらに、道の幅員の広さやフロート・ブレードストラート北端にみられる水路、水路両側の市（コールン・マルクト'Koorn Markt'）の存在は、やや傍証的ではあるが都市の北側から水路がフロート・ブレードストラートに流れ込んでいたことを想像させる。この仮説をふまえると、ドックムには外海へと接続する自然河川に加え、北側の集落へと接続する水路を交易のための主要なインフラとして備えていたと考えられる。

[52] *Ibid*, J.O.D. Kloosterman, drs. L. Prins, 2007, p.8..

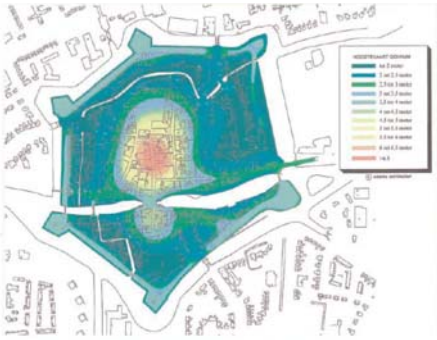


図 4.3.3.4　ドックムの地形図（出典：:J.O.D. Kloosterman, drs. L. Prins,2007）

ドックムは都市特権を 1298 年に獲得している。都市における修道院権力の影響は大きく、中世ころからすでにスカンディナビアやバルト海での交易が行われていた[53]。［図 4.3.3.5］は中世のドックムの修道院が持っていた領地（'Kloostergoederen'）を示すものである[54]。ここでは詳述しないが、都市の北部およびエー川沿い、フリースラント北東部の海岸付近に多くの土地をもつことがわかる。これら領地は—宗教改革までに（1580 年）集積したものであることに注意しなければならないが—中世ドックムにおける修道院のヘゲモニーの様相が空間的に現れている。宗教的な権力はマルクト＝テルプを核として支配領域を広げていった。

中世前期におけるドックムはホーフストラートの東側に通る道によって縦軸が複数化され「宗教的な場」との結束は強まり、宗教権力の庇護のもと北側からの水路や自然河川を利用した交易によって「都市的な場」が醸成されていったのであろう。

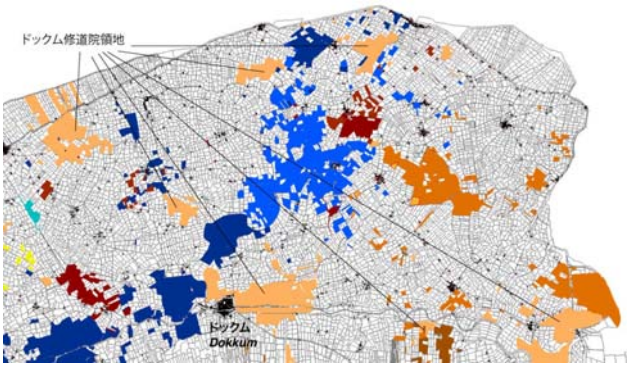


図 4.3.3.5　ドックム修道院の中世-近世期の領地（HISGIS より作成）

4.3.4　中-近世都市空間の分節構造—14-16c 中期

つぎに近世都市の骨格が成立したと考えられる 14-16c についてみていく。前項で述べたように、宗教的権力が拡大し、その庇護のもとドックムは都市化をとげていった。そして、13c から 14c ころに入るとホーフデリンフと呼ばれる有力者層が都市へと流入し都市権力は複合化していくことになる。一方、14-15c ころからフリースラント各地では度重なる紛争がおこり、都市もまたその拠点や争いの場となった。このことはホーフデリンフの流入＝スティンズの建設と同時的な現象であることを示している。さらに都市の防御・要塞化により都市の境界が明確化されてゆく

[53] *Ibid*,G. Blom ed.,2009.
[54] HISGIS（前掲注）には修道院領地の分布の情報も地籍図に重ねられている。この情報は宗教改革後にフリースラント議会が修道院の領地を接収した際に残された史料をもとに作成されており、フリースラント修道院の全領地の 80%以上が網羅されているという。

[55]。1560 年に Jacob van Deventer によって描かれた絵地図には—17 世紀における防塁の建設や外周部の宅地開発を除けば—現代まで継承される近世の都市構成がみられる。

ここでは調査成果に加え、16-17c 世紀の絵図[56]や 19c（1832 年）地籍図を素材として分析を行う。4.3.3 で構築した中世前期の都市から近世にかけての変容の様相を上記史料などから読み取り、移行期における都市空間の分節的な把握を試みる。

a. 横軸の発生：河川沿いの宅地化とブロック型街区

中央河川沿いには河川に直行する短冊型の宅地が卓越している。また絵図や通り名からは河川沿いの道における市'Markt'の存在が確認でき、河川への志向性の高さがうかがえる。

Diepswal（以下、ディープスワル）やトゥルフ・マルクト'Turfmarkt'に面する宅地は、北側後方の宅地から延長された地割りが読み取れる。先述したようにかつて奥の通り（ランヘオーステルストラートとナウストラート）は堤防＝川の境界である。つまり、北側の河川沿いの宅地は後方部の地先的な利用から発生したと考えられ、河岸地的利用から宅地化への過程が想像される。ディープスワルに直行する道が北側へとつづく道よりも狭く名前が異なることは、形成時期のずれを示唆している。また 17c の絵図にみられる多くの市（とくにフィッシュ・マルクト'Vischmarkt'やスープマルクト'Suupmarkt'）は護岸整備後の様子を示すものであろう。一方で中央部には河川と並行するホーフ・ストラートやフラース・ストラートに表間口がとられ、中世以来の都市軸としての強度がうかがえる。

ランヘ・オーステルストラートのすぐ北側にはワーグ・ストラート'Waagstraat'が通っている。絵図の名前を編年的にみていくと、ワーグストラートのガストハイス・ストラートとの交差点より西側の部分の道の名前は 17 世紀中はニウ・ストラート'Nieuwstraat'であり、東側部分のみワーグストラートと呼称されている。道の形状をみても両者は若干のずれをもって接続しており、東側部分の形成の方がより早いことが読み取れる。

このように河川側からの縦軸の方向性が第一義的にあり、その後都市の高密化や次項 b にみる市場の生成によって、ブロック状の街区が形成されたと考えられる。

b. 河岸地から市へ：片側町から両側町へ

フロート・ブレードストラートに並ぶ宅地をみると、東西ともに東へと地割りが通っている。絵図にはフロート・ブレードストラートに流れていたと推測した水路の姿（4.3.3）は 16c にはすでになく、通りの南側の端に計量所'Waag'が描かれている。東側の宅地化、あるいは都市防備のために、より東側に位置するオーステル・シンヘル'Oostersingel'へと流路が変更されたことが考えられる。

地形に着目すると、ガストフイス・ストラートとフロート・ブレードストラートの間に形成された街区は都市の中でとくに街区内部の高低差が大きく、東西にはしる道—ワーグ・ストラート'Waagstraat'—もまた急勾配をもつ。東側へ地続きに宅地化がすすみ、微高地によって縁取られた中世都市の境界が東側へ更新されていったのではないだろうか。

ブレード・ストラートは南北から流入する商品や物資の結節点として中世期から重要な河岸地であったと考えられる。そして水路が埋め立てられたのち、市場の役割をもった両側町へと変容したのではないだろうか。つまり中世都市のへりとしての河岸地から近世都市の市への変化である。16c 後期に建設された計量所や絵図に描かれた市の様子は近世の特徴をよく示している。

c. 都市西部の近世的開発：コーニングストラートの形成と両側町

コーニングストラートの成立は遅くとも 1450 年であった。コーニングストラート西側の街区には中央西よりにいびつな背割り線がみられ、地割りがレーゲウェグ'Legeweg'側にまでのびていない。一方でレーゲウェグは整形な幅の広い通りであり、また宅地割りは基本的にレーゲウェグに直交するかたちとなっている。通り南側には短冊型の宅地がみられ、北側には間口の大きな宅地などもみられる。コーニングストラートの形成が長期的かつ段階的であったことをかんがみると、レーゲウェグは両側町として 15 中期-16 世紀初頭に開発されたのではないかと想定される。

地形的にはフロート・ブレードストラートより低くなく、フラットで人工的な道形状からは近世期の計画的な造成の様相がうかがえる。

d. 都市権力の所在：市庁舎 'Stadhuis'・スティンズ'Stins'

17c の絵図によれば旧市庁舎はホーフストラートとランヘオーステルストラートの交わる角に立地している。新市庁舎はその南西、ホーフストラートの端点西側の角地に建つ（現在も残されている）。新市庁舎は 1607-10 年の間にスティンズであったモッケマ・フイス'Mockemahuis'を改築することで完成された[57]。またデ・ゼイル'De Zijl'にはブロックハイス（Blokhuis）と呼称される防壁をもった館があったことがわかり、これも以前はスティンズの居館であった[58]。

先行研究によれば 15c から 16c 初にかけてホーフデリンフの記録が残されている。そして彼らの住居であるスティンズの多くは河川南側や都市西側に多くみられる[59]。またスティンズの防御機能を考えると、その立地は南側の防御の意味を持ち都市南部にある雁行する道—ケッペル・ストラート'Keppel straat'—は同時代の軍事的な開発であると考えられる。すなわち、都市の大きな核はまだ河川の北側にあり、都市権力の多くは宗教的な場の反対側、河川沿いの都市南部の境界に存立していた。

e. 教会・修道院の領域

絵図にはマルクトに立地する教会・修道院の後背部＝北側に広大な土地＝庭が描かれている。また、マルクト南側には慈善施設'Gasthuis'などが立地し、都市内に大規模な教会や修道院の領域があったことがうかがえる。

さらに 4.3.3 でみたようにドックムの修道院は都市外—とくに北側のテルプ集落や修道院、教会が多く立地する地域—に多くの広大な領地を所有し、都市におけるヘゲモニーを握っていた。

以上、いささか断片的ではあるが中-近世期におけるドックムの都市空間を分節的に把握してきた。ドックムは南北の都市軸に加え、河川と平行する横軸を都市の東部にもつことになった。その影響はディープワルや都市東部のブロック型の街区によくあらわれている。都市東側には商業

[55] *Ibid*,G. Blom ed.,2009.、前掲書, J・ド・フリース、ファン・デァ・ワウデ、2009 年などを参照。
[56] 絵図史料は以下のものを参照した。1560 年（Jacob van Deventer）、1588 年（Braun & Hogenberg）、1616 年（Halm）、1664 年（Schotanus）。
[57] P.N.Noomen, "*De stinzen in middeleeuws Friesland en hun bewoners*", Hilversum Verloren,2009 付録 CD。
[58] Remmersma-huis
[59] *Ibid.*

的な性格をもつ町が存立していたと考えられる。一方、この時期に台頭する都市権力者＝ホーフデリンフは未開発であった河川南側や都市西部に居を構え、都市における権力構造は複合的になっていった。一方中世初期以来の宗教権力の領域は都市の北部の地区にあり、さらには都市外部にまでその支配権力＝領地は存在した。

4.3.5　近世都市の求心性—16c 中期以後

さいごに近世期以後における都市構造の変化をみておく。都市構成はさきの中-近世期のものとほぼ同様である一方、都市構造は 16c 中期以後大きな変化を迎えることになった。

宗教改革によってかつて都市のヘゲモニーを握っていた教会や修道院は衰退を余儀なくされる。必然的に宗教的な場であったマルクトの存在は都市構造としての強度を失う。さらに、ホーフストラートとデ・ゼイルの角に建つスティンズの居館が新市庁舎へと改築されることによって、都市権力の空間的な位置は南側へと偏ることになる。

また河川は中央部に堰'de ZIjl'が設けられ、海水と淡水とに分断された。同時期に護岸も整備されたと考えられ、ドックムは大きな近世河港都市へと発展していく。

これは宗教改革以前まで重要であった縦軸に変わり中央運河による横軸が都市構造の大きな軸と変わることを意味している。また 17 c に造成された城壁は堰を中心とする強い求心性を与えた。同時期に市庁舎の正面に建設された 4 つのゲーブルの住宅と市庁舎、それらで囲まれた堰＝広場は黄金時代のドックムの都市構造を象徴している。そしてこの都市構造は現代のドックムにおいても存続している。

5.　2012 年度の予定

各検討項目や考察における課題はそれぞれ本文中に示したとおりである。

また、本報告書には間に合わなかったが、2009、2010 年に調査を実施したスローテンにおいて、フリースラント州政府・現地機関の多大な協力の下、旧市街部における全住戸を対象とする文書による聞き取り調査を行なった。この調査の分析は、昨年度までの実測調査・分析等とあわせ更なる深化を図る予定である。

2012 年度は引き続き「オランダ沼地研究会」および「合同沼地研究会」において、文献や関係諸論文のレビュー、絵図や地図の蒐集と分析、調査結果のさらなる分析と検討、これらを踏まえた報告を行う。現地調査については、レーワルデン、スネークを対象に夏頃に実施予定である。また、2012 年度は本プロジェクトの最終調査年度であるため、出版計画・論文発表等の研究成果報告を見据え、プロジェクトメンバー、研究協力者との間で、その計画を具体的に議論し詰めていく。